

## 令和5年度 第2回横須賀市学力向上推進委員会 議事録

- 1 日時 令和5年9月21日（木）15時00分から16時30分まで
- 2 場所 横須賀市教育研究所 第2研修室
- 3 出席委員  
笠原委員・櫻井委員・市川委員・新田委員・太田委員・庭田委員・吉田委員  
東委員
- 4 事務局  
学校教育部教育指導課 鈴木課長 小日向主査指導主事 石橋主査指導主事  
宍戸主査指導主事 渡辺主査指導主事 北井指導主事
- 5 傍聴者 なし

### 6 会議内容

#### (1) 事務局からの報告

事務局から、次のとおり今年度の横須賀市立小・中学校学習状況調査（以下：市調査）および全国学力・学習状況調査（以下：全国調査）の結果について説明し、質疑応答を行った。

#### ■事務局

資料4をご覧ください。学力向上推進プランで掲げた目標指標について、今年度の市調査の状況としては、ほぼ横ばいもしくは少し下降しているという結果であった。上昇が見られたのは、小学校の目標2の国語の記述問題の無解答率が減少したこと、中学校の目標3で国語の正答率40%未満の生徒の割合が減少したことである。

指標の数値にあまり変化が見られなかったのは、プラン1年目で、目標指標を意識した取組が学校に根付いていないことなどが考えられる。しかし、項目によっては数値が大きく上昇した学校もあった。

資料1をご覧ください。これは目標指標に関連する調査結果が大きく上昇した学校の分析である。各項目で数値の上昇が特徴的だった9校にその要因の分析を依頼し、事務局がまとめた。A中学校などは、すべての項目において上昇が見られたので、どの項目でも分析が載っている。一部の項目のみ上昇が見られた学校にも、その上昇率が大きかった学校には分析を依頼した。

資料2は、全国調査の結果について、市内の児童生徒の質問紙調査と教科調査の結果をクロス集計したものである。後半の資料は、文科省が作成した全国の集計結果だが、市内の結果も全国のクロス集計の結果もほぼ同様の傾向が見られ

た。第1回の推進委員会で「教員がなかなかほめることができていない」という意見があったが、「教員がよいところを認めてくれている」と感じている児童生徒は、「自分にはよいところがある」と感じており、自己肯定感が高い傾向にある。そして、「自分にはよいところがある」と答えている児童生徒は、「課題解決に自分から取り組んでいる」と考えている割合が高い傾向にある。自己肯定感が高い児童生徒ほど、どの教科においても正答率が高い傾向にあり、自己肯定感の高い児童生徒は先生に認めてもらえていると感じている。

次のページは、読書が好きかどうかと正答率、ICTの使用頻度と正答率とのクロス集計である。

資料2の最終のページについては、今年初めて全国調査で行った社会経済的背景と正答率とのクロス集計である。これまでも、経済的背景と正答率は関係していると言われており、相関があることは資料からもわかるが、経済的背景が低い児童生徒でも授業で主体的・対話的に取り組んでいる児童生徒の正答率は、そうでない経済的背景が高い児童生徒の正答率を超えている。横須賀は地域によって学力差があることが話題になるが、主体的に授業に取り組んでいることを実感している児童生徒は、経済的背景に関係なく正答率が高くなることを示すために資料として掲載した。

資料3については、後ほど担当から説明する。

資料5は、第1回の協議で出た学力向上に関係していると考えられる要因を、学校・家庭地域・行政で分類してキーワードにし、それらを委員長に構造化していただいた。これを見ていただくと、自分の学校はどこに強みや弱みがあるのか、どことつながりが薄いのかなど確認できると思う。この後の協議でも、この資料を使い協議していただけるとありがたい。

## ■事務局

続いて本年度実施した市調査及び全国調査の結果について報告する。資料3をご覧ください。まず、市調査の結果について、昨年度と比較するとそれほど変化はなかったが、小学校5年生の結果が下がり、全教科、全学年において全国の平均正答率を下回った。

8・9ページには質問紙調査の結果を載せている。自己認識にかかわる項目については、いずれの学年においても全国とほぼ同程度と捉えることができる。社会性にかかわる項目のうち、「対話・話し合い」については、学年が上がるにつれて値が上昇している。学級環境にかかわる項目のうち、「いじめのサイン」「対人ストレス」については、全ての学年において下回っており、いじめやその兆候、人間関係の不安を感じている児童生徒の割合が全国と比較して高い。生活・学習習慣にかかわる項目のうち、「学習習慣」については全ての学年において全国平均値を下回っている。

続いて11・12ページが全国調査の結果である。この結果については、中学校の英語を除き、いずれの学年・教科においても、全国の児童生徒全体の平均正答率を

下回り、昨年度の結果と同程度であった。一方、中学校3年生の国語および英語においては、記述解答する問題の無解答率が全国を下回っており、これまでの指導の成果が伺えた。

全国調査の質問紙調査の結果については、本市全体の結果と、全国の結果との差が5ポイント以上である質問事項について、13から16ページまでにまとめた。小学校と中学校に共通していることは、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と回答している児童生徒の割合が低い傾向である。他には「家庭で、自分で計画を立てて学習をする」という項目も低い結果がでており、課題であると捉えている。中学校においては、ICT機器を使用する頻度が全国と比較して高い結果が出ている。

説明は以上である。

#### ■委員長

事務局への質問や確認はあるか。

#### ■委員

学力向上推進プランの指標としている市の質問紙調査について、実施時期が各学校で違っていたり、11月に2回目を実施するなど複数回実施したりしている学校があると思うが、各学校の実施状況等を市教委は把握しているか。

#### ■事務局

いつ行っているかというところまでは把握していない。

#### ■委員長

先のご指摘は、質問紙調査を実施する時期によって、また実施する回数によって市調査の結果が前年度を上回るか下回るかに影響があるということか。

#### ■委員

4月は対人関係などのストレスを感じていることが多いが、6月頃には対人関係も高まっている。9月頃、あるいは行事が終わった時期には自己有用感や自己肯定感も高まっている。質問紙調査を年間何回か行って、生徒に結果をフィードバックしていくと自己認識ができて生徒の意識が高まるのではないかと学校で話している。自校では質問紙調査を11月にも実施して、結果を生徒にフィードバックすれば、推進プランの質問についての認識が生徒にも高まり、結果が向上するのではないかと企画会議で話した。それができれば学力向上推進プランが教員にも生徒にも意識されるのではないかと思う。

#### ■委員長

市教委は、実施している時期までは把握していないということか。

#### ■事務局

質問紙調査は全市的な調査として5月1日から31日までの期間に、各校の都合で実施するよう依頼しており、ご指摘のあった4月の実施は避けている。二回目の質問紙調査を独自に実施している学校があるのは伺っているが、その結果までは把握していない。

#### ■委員長

非常に大事なポイントである。教育に関しては結果や数字だけで判断しないようにと言っているが、結局は数字が独り歩きしてしまう。それならば委員の指摘があったように、より子どもたちの状況にあった形で調査を行うことによって、出てくる値が違うのではないかということである。それが、実際に子どもと関わっている教員の実感だとすると、無視できない重要な視点である。質問紙調査は実施する時期によって、見え方や結果も変わってくるということである。結果をどう子どもたちにフィードバックして生かしてもらおうかが、本来大切なことである。

他に意見はあるか。

#### ■委員

市調査の算数・数学の数値を確認すると、集団は違っているのに小学校では学年が上がるにつれて下がっていき、中学校1年生では上がっている。ここに子どもがつまずきがあるのではないかと思う。学年が上がるにつれて難しくなっているのか。

#### ■事務局

集団によって異なるが、同一集団を追うと、本市の児童生徒は学年が上がるにつれて、全国平均に近づく傾向がある。しかしながら、小4から小5にかけては算数の平均正答率が下がることが少なくない。

#### ■委員

中学校在籍だから、その原因に大変関心をもっている。そこを、どう分析しているのか。

もう1点、平均をとっているが、正答率がどのような分布になっているのかが気になる。それらを見えるようにしていくことも大切なのではないか。

#### ■事務局

小学校5年生の算数の結果が下がる原因としては、4年生の算数の内容に数の概念が大きく変わる内容が多く含まれることや、抽象的な内容が多くなり、つまり子供が多いことではないかと分析している。小学校教員の実感はどうか伺いたい。

## ■委員

自校では夏休みに職員で市調査の分析をした。自校も学年が上がるにつれて算数の結果が下がっている。低学年は具体物で目に見えたり、操作したり、直接体験しながら考えたりする。高学年になると、数が大きくなったり、概念的な内容になったりしてくるので、だんだん自分事として捉えられなくなってくる。そして、算数の問題と自分との乖離が始まる。だから、まずは体験的な活動や操作活動が大切なのではないかということ職員で共有した。そして、学習内容が徐々に抽象的になることは仕方がないことなので、単元計画の中で、いかに子どもたちが自分事として課題を捉えられるようにするかを考えることが大切だと確認した。

資料1のA中学校の分析にもあるように、各教科等で考えたいような課題や問い、興味を引くような導入があると、子どもたちが前のめりになれる。また、そのような主体的に取り組める学習活動を取り入れた単元計画を作成していくことが重要なのではないかということ話をした。自分事として想像することが難しい子に、やってみたいな、考えてみたいな、伝えてみたいなという動機付けが重要なのではないかと校内では共有した。

## ■委員

算数は縦の系統性がはっきりしている教科である。低学年では具体物を操作できるが、学年が上がってくると概念的になり、目で見えない比や割合になってくる。2年生の後半から九九を覚え、3年生からは九九を使った学習が多くなる。そこまでは何とか対応していた子たちが、4年生くらいになると、つまりき始める。そのため4年生にTTや少人数指導などを取り入れているが、この段階でつまりきに対応できないと高学年になって、算数の時間にもう何もわからないという状態の子どもたちが出てくる。

正答率の分布図は、二こぶになっていることが多い。特に正答率が低い子たちがぐっと増えていく、その分全体の平均正答率は下がっているのかなと思う。今の学校でも前任校でもそのような結果であった。

中学校で上がるのは、専門性の高い教科担任制の影響があるのではないかと思う。自校でも、高学年の算数を教科担任制で行っている。子どもたちのアンケートではわかりやすいという声が多い。また、教科担任性を導入すると、専門的に系統をおさえながら、複数のクラスで指導することができる。これまで小学校は、一度やった授業をもう一度行うことはほとんどなかった。授業改善のチャンスがあり、その分、子どもたちにもよりよく伝えられる。自校では、わずかではあるが、学力の向上につながっていると分析している。全てこれが原因ではないかもしれないが、下の学年からの積み上げがうまくいっていないことや小学校の学級担任制の中でカバーしきれない子が増えていることも原因の一つではないかと思う。教科担任制をうまく使ったり、教員数が増えて個別で対応できるような

環境が整ったりすれば、状況はさらに改善していくのではないか。

#### ■委員長

小学校教員だけではないかもしれないが、このジレンマでずっと学校は進んできている。なんとかしなければいけないが、実際にはそこまで手がまわらない。そして、対応できないまま取り残してしまっている現状が、ある意味数字で裏付けられている。これが全てではないと思うが、そういう解釈もできる。

#### ■委員

保護者の立場から、学力低下について意見を述べたい。携帯ネット安全委員会というものを市P協に用意している。各学校から依頼を受け、講師として話をして行く機会がある。色々な資料がある中で、携帯の使用状況と学力の関係性を示す資料として、4時間以上スマホを触ったり、ゲームをしたりする子は20%くらい学力が下がるというデータがあった。スマホなどの使用状況については横須賀も調査していると思う。市P協で把握しているところでは全国より少し時間が長いという状況であったかと思う。それがちょうど小学校5年生くらいから顕著に現れるので、その結果がそこに紐づいているような気がしている。特に年々平均正答率が落ちてくるのがスマホの使用状況とクロスしているので、それらが関係しているのではないかと思った。スマホの使用状況も絡めて問題を考えていったほうがいいかもしれない。スマホの使用制限などは、まさにPTAが考えるべきことかなとも思う。

学校では、この質問紙調査の結果は、子どもたちに見せているのか。また、指導に関係づけるようなことは行っているのか、

#### ■委員

個人面談の際に教科調査の結果と合わせて質問紙調査の結果も併せて示し、生活状況の良いところや改善点を保護者と共有することがある。

#### ■委員長

他に委員からの質問がなければ、資料1の大きく調査結果が上昇した9校に共通することがあるか、事務局からの説明を求め、その後協議したい。

### (2) 協議

事務局から、目標指標に関連する調査結果(値)が大きく上昇した学校の分析やクロス集計の結果等について説明し、成果に繋がっている要素を見出すとともに、その背景について協議を行った。

#### ■事務局

資料1は、各学校が分析にしたことを事務局が聞き取り、まとめたものであ

る。顕著なキーワードとして、4点ある。

1点目は「動機付け」である。動機付けが主体的な学びにとって大切であることは理解されていると思うが、B中学校のように「何のために行っているのか」や「状況によって行う」など、必然性のある動機付けをしている。このような点が、これらの学校には共通している。

2点目は「ふりかえり」である。これらの学校では、始めだけでなく授業の最後がしっかりと意識されている。例えば、A中学校のように「がんばりを自覚する」「乗り越える楽しさ、理解できるようになるうれしさを少しずつ実感する」などの自覚や実感をもたせている。楽しかったという思い出だけで終わるのではなく、自分たちが何を学んだのかという自覚や実感がセットになっている。これらに次の学校教育で目指す方向性が出ているのではないか。楽しく、子どもたちがわくわくするような授業が大事だということは理解が進んでいるが、何のためにそういう体験をさせて、最後に子どもたちが何を自覚し実感できるのか、そこまでセットで考えていくということがこれら9校では意識されていると思う。

3点目は「話し合う」こと。対話的な学びの大切さは理解されているが、ここに挙げた学校では、対話が「日常的に行われている」ということである。B中学校の分析の「話し合う」ということが特別なことではなく、日常的に行われているという部分や、E小学校の自分の意見が言えたり、聞けたりする風土を作っていくという部分など、話し合いが学びの文化になっていることに注目したい。日常的に話し合う風土があるということが抽出した9校の特徴である。

また、例えばC中学校の分析にあるように、話し合いの中で自分の意見が他と違っていても自分の意見を表明する、同じ意見でも自分なりに考えて発言するなど「意見が人によって違う」ことへの耐性が子どもたちの中にある。人と違うことが日常的で当たり前であるという文化が子どもたちの中にできあがっている。A中学校の分析にも、多様な価値観という表現がある。価値観は多様であることは当然だし、そこから話し合いが始まるということが子どもたちの中に定着していることがうかがえる。

最後は「安心して学べる」ということである。どの学校にも共通していた。なぜ子どもたちが安心して学べるのかということ、教師がしっかりと子どものことをほめているからだろう。教師が子どもをほめることの大切さを疑う人はいない。だが、これらの学校に共通するのは、プロセスをほめているという特徴である。結果がよかったか、できたかどうかではなく、むしろ、失敗した時とか、うまくいかなかった時に教師が何を価値づけるのかということが大切になってくる。これらの学校にはその大切さを認識している教員が多いという印象を受けた。

以上が文章記述から分析した共通点である。

また、これらの学校には、これらの視点に基づいた授業づくりや学級づくりを実践しているミドルリーダーが存在していることも共通点である。研究主任などをやりながら、研究のビジョンをしっかりとって他の教員をリードするようなミドルリーダーや、管理職や総括教諭などと若手教諭の間にたって、話しやすさや

職員室の場づくり等においてリーダーシップを発揮するようなミドルリーダーである。

#### ■委員長

多くの視点をいただいたが、これらを踏まえて本日の協議の柱である学力向上に繋がる要素や背景を見出していきたい。

#### ■委員

9校は大きく成果をあげているが、市内全体はそこまで成果をあげていない。学校長の立場としては、その原因を我々が考えなければならないと思う。先ほどの話では、校内研究、ミドルリーダー、主体的な学びの大切さなどがポイントであった。校長会の中で校内の状況を聞くことがあるが、まだまだ教師が学ぶ環境づくりや校内研究自体に取り組めていないという話を耳にする。校内研究はまさに教師の授業改善につながるものであり、主体的・対話的で深い学びについて研究し、実際の授業を通して具体の姿を見合い、教師集団の質を上げるものである。

前回の話し合いでも、若い人が多くなっているのに、授業を観る機会が少ない。本当は学ばなければならないのに、授業改善についての学びが弱いということが話題になった。実際に私もそう思っている。「小中一貫教育に関する日」の授業でも、目的もなく話し合いをさせているだけ、グループになってはいるが単なる意見交換だけで話し合いに深まりがないなど、昔と変わらない授業を観かける。本当にこれが授業改善につながるのかと思う。指導計画や評価計画も十分ではない。そう考えると、まずは校内に指導主事等を招き、主体的・対話的で深い学びとは何か、主体的に子どもが学ぶとはどういうことかなど、根本から学び、全員が理解を深めていくこと、具体的な授業を観て学び、いかに多くの教員にその学びを定着させていくかということが重要である。今後は、校長会でも全員を引き上げるためにどうしていけばいいかを考えていきたい。

子どもの学力より、まずは教員の力を伸ばすことが先ではないか。先ほど事務局があげたようなことを教員が理解し、学習すること、その環境を用意することが、学力を向上させていく背景に必要なのだと感じた。

#### ■委員長

令和の日本型学校教育の答申は令和3年と4年で二本があるが、これらをセットで読むと分かりやすい。令和3年の答申には、個別最適な学びと協働的な学びが大切であるということが書かれており、令和4年の答申には、これからの教員に求められる資質について書かれている。今、教員として必要な資質は、子どもに求めているものと相似形であるという言い方がされている。個別最適で協働的な学びを子どもたちに定着させるには、教員がそれをしっかりと理解して取り組まないと、そのような授業はできない。今の発言にあったように教員の学びなく



しては、授業改善はできないはずである。だが、教員は、はたしてどこまでそのことを理解して日々の授業に取り組んでいるのか。授業研究になると、授業をすることが目的になってしまい、何のためにそれをしているのかが分かっていないことがある。子どもたちに言っていることをそのままその教員に返したい場面に出会うことがある。教師の学びが組織的に行われていない現状が見受けられる。

一方で、現状を解決できない難しさは、特に管理職やミドルリーダーに「働き方改革」という言葉が見え隠れしてしまうからではないか。そして、その言葉の陰に隠れて、やらないといけないことができていないこともまた問題である。そして、その状況を見直していかないと、時間だけが経って、また次の新しい学習指導要領が出てきてしまう。そうすると、今求められていることが定着されないまま、次にいってしまう。その繰り返しである。PDCAサイクルが回っているところの話ではない。説明を受けて、それがようやく理解できたところに新しい学習指導要領になってしまう。これを変えないといつまでたっても変わらないのだと実感している。

#### ■委員

コロナ禍を経て、ようやく教育課程研究会 2 日目が通常通り行われた。自分は国語の部会で、近くの教員と指導案をつくるワークショップに参加した。グループの中で私は年長者だったが、終わった後に若い教員から「先生も悩まれるのですね」「こうやって授業をつくるのですね」と言われた。一瞬戸惑いを覚えたが、なぜそういう発言が出てくるのかと考えると、今まで学びに行く場がなかったからなのだろう。校内でも皆で集まるのは控えたほうが良いということがあり今やっと校内研究等ができるようになったから、学びたい、授業研究したいと思っている人が多いのではないか。だからこそ、各小中学校の教科等指導員の授業も色々な教員が観に行くし、自分が行う教科等指導員の授業にもたくさん教員が参観にくると聞いている。自校の管理職からは、そういう機会があったらぜひ観に行くようにと言われている。しかし、自分から外に学びにいかなければならないと思う反面、校内の色々な仕事がある関係でなかなか観に行けない事情がある。だからこそ校内での研究授業をいかに充実させられるかが大切だと思う。

自校では、研究授業の後は、全体で授業について話し合う時間を確保している。また、今年は研究グループもつくり、グループ内で授業を観合い、たとえ 10 分でも良かった点や改善点を伝え合うようにしている。子どもたちにどのような成果がでたかというところまでは検証できていないが、今やっと色々な教員たちが授業を観たい、学びたいという気持ちと、やらなければならないという使命感がかみ合う段階にきたと思っている。今後は、研究推進委員や学習グループ、管理職や総括教諭とさらに話し合い、それらをどう高めていくのかを日々考えている。

#### ■委員長

とても大切なことである。一つでも、具体的に何かに取り組むということが重

要。「色々課題があるよね」「大変だよね」と話し合うだけでは、何も具体的なことが進まない。そして、また同じことを繰り返してしまう。何か一つでもいいから、これをやろうということを実際に取り組んでいけるかどうかがとても大切なことなのである。

他に意見はあるか。

#### ■委員

子どもを丁寧に見取り、伸ばしていくための評価や価値づけをしていくことが大切である。「あなたのこの発言が良い」、「あなたのこの考えが次につながる」という評価ができるように、教師側が教材研究や内容理解をしていなければならない。しかし、若い教員は、なかなか時間をつくれないのかもしれないが、教材研究ができていないように感じる。例えば国語の「ごんぎつね」では、前書きがあることや、作者の思いも確認しないで授業を始めている。理科では「シュリーレン現象」という用語を知らないで授業を始めている。ただ教科書をなぞって授業しているだけでは、子どもの良さを見付け、価値づけることはできない。

自校の校内研究は道徳を扱っている。研究を行うにあたり、教師にアンケートをとったところ、そもそもモデルとなる授業が分からないということだった。そこで、筑波大学附属小学校の加藤先生を招き、1時間の授業を観せてもらった。若い教員は、その授業を観ただけで変わった。こういう授業をすればいいのか、こうすれば子どもは葛藤するのか、それを黒板で構造化して見せていけばより深まるのか、ということが一つの授業を観ただけで理解できた。そういった場やモデルになる人材がほしい。

しかし、職員や管理職の異動がある中で校内でどこまでそのような場や人材を育てていけるのかということは悩んでいる。校内研究も長くて3年でテーマが変わる。それで何が残るのかということも不安である。

そこで、校内の若い教員には、何か一つでも自分の専門の教科をつくって、研究会に入って、子どもの見取り方や授業のポイントなどを学んでほしいと伝えている。しかし、横須賀市では研究会に所属していない教員が多くなっている。自分自身、理科研究会に入って活動しているが実態は先細りの状態が見えている。必ずどこかの研究会に所属して、月1回会合をもつようにしている市町村もあると聞いている。横須賀市でそのような活動ができるのかどうかは分からないが、せめて研究に打ち込む時間と機会がほしい。そして、そのようなことの大切さを伝えてくれる人材がほしい。

#### ■委員長

今の発言の中に、市の研修が含まれていると思うが、市の研修内容の見直しはどうなっているか。学校現場では、なかなかできないモデルになる人の授業を観て学ぶような研修はあるのか。

## ■事務局

教科等指導員の公開授業というのがそれにあたる。教科等指導員は市内に 31 人いて、全ての教科等に展開し、小学校と中学校それぞれで公開授業を行っている。昨年度あたりから徐々に活性化していて、今年度もかなり参加者数が増えている。

また、現在、教育委員会主催で行っている年 2 回の教育課程研究会の内容や実施方法を見直している。ここ最近、コロナ禍で例年の方法で実施することができなかつたので、新たに実施方法を検討し、しっかりと研究できる体制を計画している。

## ■委員長

教科等指導員の授業は、授業を観る視点は示されているのか。参加者が三々五々に授業を参観するのか、あるいは授業者が観る視点を参観者に伝えているのか。教科等指導員をされている委員、その点はいかがか。

## ■委員

観る視点は伝えている。昨年度は古典を扱ったが、現代でも昔でも書く文章は読ませたい対象者によって文体が変わってくることを子どもたちが気付いているか、という点がポイントだった。そして、そのことを、古典を調べる体験を経て、どのように授業の中で表出させていくかということが授業のしかけだった。協議の中では、提示した視点の中で見られた子どもの姿を伝え合った。目指す子どもの姿を引き出すためには、こんなことをしてもいいのかというような驚く声もあった。

また、参観者は自分の授業について何かしら課題をもっているので、そのことについても相談を受けた。日頃困っているような些細なことも質問を受け、自分だけではなく、参加している方に話を振って考えてもらうような情報共有する時間もあった。

## ■委員長

若い教員は、そもそもどのように教材研究すればよいか分かっていないことがある。ということは、なぜその教員の授業がうまいのか、その授業をどのように観たらいいのか、そこすら分からないということを考えておく必要がある。そうしないとなんとなく授業を観てしまうので、授業を観る前に視点を与え、この授業ではこの部分が大事な視点になることを伝える必要がある。

例えば「今日の授業の中で良かったなと思えたところはないですか。」と聞きながら、何か共通に確認できるようなものを提供しながら観てもらおう。ただ授業を観てくださいでは、視点がバラバラで話し合いもすれ違ってしまう。そういう工夫があると、観に来た教員が何かおみやげをもって帰れて、もっと行ってみようとなるだろう。

我々が教員だったころは、あこがれの先輩がいた。授業名人と言われるような人たちである。そうすると、あの先生みたいになりたいなと思って、必死で真似

をする。なかなか到達はしないのだけれど、試行錯誤して、自分の中のできないことも自覚しつつ、やってみようと挑戦する。

しかし、小規模な学校だとそういう教員がなかなか校内にいないので、校外に人を求めていくことになる。そういう点で、市教委が仕組みをつくる必要がある。学校の課題を含めて、対応できる研修の在り方とか教育委員会が何をバックアップしていくのかがポイントになってくる。

資料5を見てほしい。学校が学校内と学校外のものをどう使っていくのかということ、教育活動として授業を中心としてやっていくこと、校長が経営的な視点からそれらをどのように結び付けていくかということ、これら全体が意識化されていき、具体的な問題の解決の糸口が色々なところから出てくるのだと思う。

すでに皆さんのお話から大切なキーワードはあがってきているように思うが、他にいかがか。

### ■委員

私は現在管理職だが、もともとの専門は理科である。先日、たまたま理科の教員が二人休むことになり、私が授業をすることになった。一番若い初任の教員と授業検討をし、一緒に模擬授業をして準備したが、次の日台風で休校になってしまった。だがその教員は、その日も模擬授業をして準備を重ねた。週が明け、授業を観にいったら、その教員がいきいきと授業をしていた。これでこの教員は一步進めたのかなと感じた。そして、ミドルリーダーはこういうことができていなかったのかなと思った。自校の理科の教員は4名いて、20代が3人と30代前半が1名である。みんな経験が少ない。どこでミドルリーダーを育成していくのかも、委員の意見を聞いて課題だと思った。こういう問題は6クラス規模の学校でも起こりうる問題になっている。

私も、管理職としてもっともっと外に出て授業を観てきなさいと言っているが、今度初任者が自分のつてを使って他の中学校に授業参観に行くと言い出した。すごいことだと思う。良い授業を観ることも大切だし、それらを校内にフィードバックしていくことも重要であると感じた。

### ■委員長

学校の中ではまだまだ工夫できることが多くあるはずである。同じような事例で、ある学校で学級崩壊に近い状況になってしまって、授業が成り立たないクラスに外部の人間が入って、一緒に授業研究する中で教員が何に悩んでいるかを聞き出した。その教員は徐々にもう少しがんばってみようという気持ちになった。さらに関わっていくと、その教員が周りから認められていない、ほめられる経験がないということが分かってきた。自分自身がほめられたことがないから、子どもをほめられない、どうやってほめたら喜ぶか、うれしい気持ちになるかということが分かっていないということに気付いた。管理職やリーダーが、たわいもないことでもいいからほめたり、受容的な会話をしたりすることが大切である。最

近よく言われている心理的安全性である。心の奥にある不安感を取り除いて、前向きにすることが大事なことなのである。管理職が認めて、ほめて背中を押してあげることは、授業に直接関係ないと思うかもしれないが、実はすごく大切なことで、そのあたりにも目を向け、意識的に取り組むとずいぶん違うということを様々な所で耳にする。だから相似形なのである。子どもの学びと教師の指導力の向上は、一緒にやっついていかないといけない。

#### ■委員

保護者の立場からすると、先生方は、よくがんばってくださっていると思う。以前はPTAの中でも先生方に対する批判があったが、今は肯定的に観るようになった。また、教員の働き方改革ということが話題になり、保護者もそれに理解を示している。

コロナ禍以前に道徳の教科書採択の委員として関わったことがある。候補としてあがった中の1冊を読んだ際に、お年寄りを扱った読み物や身内を失った人の読み物などがあり、私はきっとこの教科書なら子どもたちの心が動くだろうと思った。しかし、ある担当の先生が「子どもたちの読解力では、この教科書の内容は理解できないだろう。」「子どもたちの読解力では時間内に学習が終わらないだろう。」と発言されていた。もちろん現場の先生がいいと言う教科書を選ぶことがよいと思っているが、その時に先生の手詰まり感のようなものを感じた。先生方が未熟ということではなく、教え方のモデルが無いからなのか、どう教えていけばいいのだろうというような手詰まり感をもっているように感じた。

#### ■委員長

他にご意見はあるか。

#### ■委員

学力の向上には教師の授業に対する意欲や向上心が必要なのは当然だと思う。また、学びたいという思いに火をつけるには、良い授業を観ることだと思う。先日も、管理職の立場から研究推進委員長に外部の授業を観に行くようなツアーを企画してほしいとお願いした。しかし、中学校は土日の公開授業となると、部活の指導などで行けないことが多い。また、市内の研究授業なども会議とぶつかってしまうなど、やるべきことを整理していかないと、実現するのは難しい。私もそうだったが、教材研究は何を教えるか、どう教えるかで終わっていた。でも、本来は子どもがどう思って、どういう学習課題に向き合おうとしているのかというところから始まる。そこができて初めて子どもが課題と向き合うことができる。

また、学習課題も本当に子どもが調べたい、やりたいと思っているものなのか、単純に教員に調べてと言われたから取り組んでいるものなのか、本物は前者だと思う。しかし、部活動指導や生徒指導もある中で、そこまで行きつく間もな

く、次の日のために教科書を開いて、プレゼンテーションのスライドやワークシートをつくっている。それが日常である。今求められている学習のスタイルは、今日明日教材研究すればできるものではないだろう。本当にやるべきことを整理していかないと、それはできない。そして、そういった整理をするのは我々管理職だと思う。そうしないと、目標としているような学力は身に付かない。

その他には、教員が研修や研究授業に行った時に、その場が意味ある場であったと感じてもらふことである。また授業を観に行きたいと思ってもらえるようにしないといけないし、そうなるようなファシリテーターがいないといけない。研修に行ったら自分の思いが表現できた、楽しかったと思うようにしたい。それが教材研究につながり、目標としている学力観の理解につながるのだと思う。

#### ■委員長

様々な視点から、皆さんが感じていることを言葉にさせていただけた。今日頂いたことを事務局と共に整理していく。

最後に何か意見はあるか。

#### ■委員

自校に算数の教科等指導員がおり、昨日その授業が行われ、すごく意味のある話し合いができたと言っていた。算数の授業に関心をもって観に来てくれている人たちだから算数に特化した話し合いができる。また授業をやりたいと言っていた。それはどの教科等指導員の授業でも共通に言えることだと思う。その教科等に興味関心がある人もいれば、その教科等に困り感があって参加している人たちも多くいる。そういう人たちが同時に集まるからこの事業は、とても良い取組なのだと感じている。

自分も教科等指導員をやっていた時に、授業を観る視点を示したことがある。自分が出した視点に対して、参加者からフィードバックがあるので、自分自身の勉強にもなる。参加者や機会を増やすことは難しいかもしれないが、とても良い取組なので、教科等指導員の授業を観る機会が少しでも増えたらありがたいと思う。それが市内全体の教員の質をぐっと押し上げることに繋がると思う。

そのためにも、様々な仕事や制度上の整理と目の前で一緒に働いている仲間同士により良い関わりが生まれるような好循環を作っていきたいと思っている。

#### ■委員長

今、教育課程の年間授業時間数の調査結果がでて、あまりにも多過ぎるということが課題になっている。コロナで様々なことを見直されてきたはずなのに、捨てきれない、切り崩せない状況が学校にはあるようである。どこかで思い切ってやらなければならないことがあるのではなか。それが1校で実施が難しいようなことは、市教委がどのように投げかけていけるのか考えてほしい。また、きっちり授業時数を守っているなら、それを超えて授業する必要はないと学習指導要

領には書かれているのだから、それらを含めて全体の教育課程をどう組んでいくのかが重要なのだと感じた。

以上で協議を終了する。

# 令和5年度

## 第2回 横須賀市

# 学力向上推進委員会

- 令和5年(2023年)9月21日(木)
- 教育研究所 第2研修室

### 【次第】

- 1 開会
- 2 教育指導課長あいさつ
- 3 本日の趣旨・流れの確認
- 4 横須賀市立小・中学校学習状況調査および  
全国学力・学習状況調査の結果について

資料1～5

#### <協議事項>

目標指標に関連する調査結果(値)が大きく上昇した学校の分析やクロス集計の結果等から、成果に繋がっている要素を見出し、その背景について協議する。

- 5 第3回学力向上推進委員会(学校訪問)について
- 6 連絡
- 7 閉会

資料6



2023

## 横須賀市学力向上推進プランの目標指標に関連する調査結果(値)が大きく上昇した学校(抽出校9校)の自校の取組についての分析



本年度の横須賀市立小・中学校学習状況調査（以下：市学習調査）において、学力向上推進プランで掲げる目標指標の目標値に関連する調査結果（値）が大きく上昇している項目がある学校を、市内で9校（小学校5校、中学校4校）抽出した。

そして、各学校には、上昇した項目について、昨年度の小4時や中1時の学級経営や学習指導等を振り返ってもらい、その要因について分析してもらうよう依頼した。

以下は、その分析結果を学校担当の指導主事が聞き取り、まとめたものである。

## 目標 1 学び合う集団の育成を図る

### ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

(ア)「授業等の話し合い活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」

(イ)「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が向上した要因

(A 中学校 (ア) R4 年度:64.9% ⇒ R5年度:78.7% 13.8%↑

(イ) R4 年度:83.0% ⇒ R5 年度:88.3% 5.3%↑ ※以下は年度省略)

- ・昨年度、校内研究により積極的に課題解決学習を取り入れ、生徒たちの活動が保障されるよう取り組んだ。
- ・各教科等で考えたいくなるような課題や問い、興味を引くような導入（動機付け）を行っている。
- ・話し合いの場面が各教科等共に多い。（内容・難易度で協力する必要がある課題設定）
- ・安心して学習・生活できる環境を教師と生徒でつくってきた。（生徒指導・行事・道徳）

(B 中学校 (ア) 68.3% ⇒ 85.4% 17.1%↑ (イ) 90.2% ⇒ 92.6% 2.4%↑ )

- ・各教科等の授業で、話し合う機会を意識的に取り入れている。また、「ここからグループで話し合う」というような区切った授業展開よりも、状況によって「隣（まわり）の人と相談する」というように気軽に話し合う場面が多くしている。
- ・年 10 回実施している全校集会での全体講和（学校長、学力グループ等が担当）においても、一方的な講和ではなく、周囲と話すような場面を設定するようにしている。「話し合う」ということが特別なことではなく、日常的に行われていることの成果と考える。

(C 中学校 (ア) 69.5% ⇒ 82.1% 12.6%↑ (イ) 95.2% ⇒ 92.1% 3.1%↓ )

- ・校内研究において、生徒同士のつながりを授業の中でも大事にしてきている。これは校内研究だけでなく、日常の授業においてもすべての教科等でペアやグループでの話し合い活動が展開され、しっかりと定着してきていると考えている。
- ・生徒会活動、学級活動も重視して取り組んでいる。生徒総会においては、事前の学級の取組から丁寧に話し合いが行われ、学級の意見をしっかりと総会に持っていっている。校則に関すること等、様々な場面で、自分たちの学校生活を考える話し合いが行われていることが、違っていても自分の意見を表明するということや、同じ意見でも自分なりに考えて発言するといったことにつながっていると考えられる。

## 目標 1 学び合う集団の育成を図る

(D 中学校 (ア)71.6% ⇒ 77.6% 6.0%↑ (イ)90.1% ⇒ 92.1% 2.0%↑ )

- ・教員全員が1人1台端末（Chromebookに関することは、以下、1人1台端末という）をツールとした授業改善に取り組んでいる。1人1台端末の使用を何のためにやっているのかを常に確認しながら研究を進めている。
- ・1人1台端末を使うことで、他人の意見にも容易に触れられ、対話的な学びも日常的。生徒たちは多くの授業を「楽しい」と感じていることが要因と考えられる。

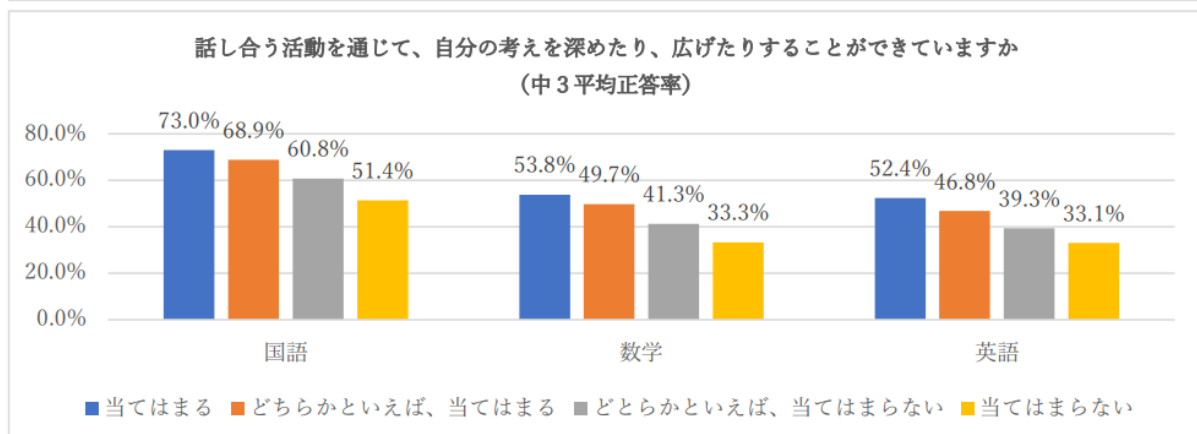
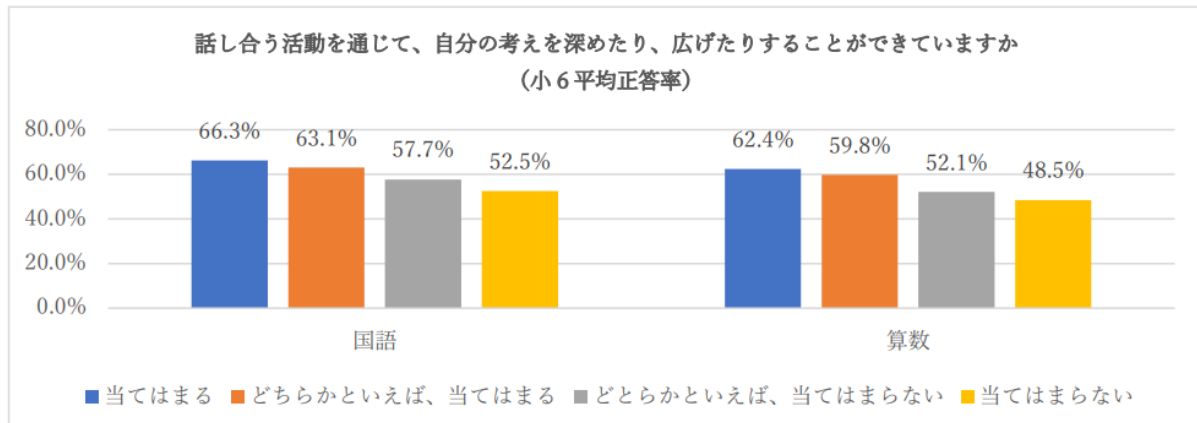
(E 小学校 (ア)60.5% ⇒ 74.4% 13.9%↑ (イ)67.4% ⇒ 94.9% 27.5%↑ )

- ・学校教育目標やグランドデザイン、重点プラン、学校研究など、各項目の内容をしっかりとリンクさせるとともに、職員への周知を数年かけて行っている。
- ・より子どもの具体のイメージが共有しやすいように、「表現」にテーマを焦点化し、共通言語を使うこと、自分の意見が言えたり、聞けたりする風土をつくっていくことが校内研究などの場面で確認され、全体的な取り組みとなっていることが成果につながったと考える。

(F 小学校 (ア)48.8% ⇒ 76.8% 28.0%↑ (イ)88.4% ⇒ 93.1% 4.7%↑ )

- ・低学年のころから教師が「あなたたちのことを大切に思っているよ」ということや、教師から積極的に「ありがとう」「ごめんね」といった感謝や謝罪の気持ちを伝えるようにしている。日常的にほめること（認めること）を意識して関わっている。

図1 全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果～教科に関する調査結果と質問紙調査結果のクロス集計～①



「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が向上した要因について

(A 中学校 76.6% ⇒ 82.0% 5.4%↑ )

- ・小学校時代は指導困難な状態が続き、授業が成り立たなかったり、児童理解が追いつかない状態になったり、自分自身と向き合ってもらえなかったという生徒が多くいた。リーダーの育成、決まりを守ることの大切さ、生徒ができたことをきちんと評価する姿勢など基本的な生徒指導を大切にし、授業が成り立つ状態をつくった。そのことで生徒一人一人の課題に向き合う事ができるようになり、自己肯定感の向上につながったという評価ができる。
- ・道徳や特活などを通して多様な価値観に触れ、学習することで自他を理解できる生徒が増えた。

(C 中学校 78.1% ⇒ 84.1% 6.0%↑ )

- ・学級活動をしっかり行っている。行事などに積極的に取り組む生徒が多く、またきちんと振り返りを行っている。頑張りが自覚できるような振り返りを行っている。教師は価値付け、学級通信に載せるなどしている。

(E 小学校 67.4% ⇒ 87.2% 19.8%↑ )

- ・子どもの接し方が重要と考える。職員によって違いはあるが、子どもの考えや発想を大切にすること、肯定的に考えることを促すような声掛けをすることなどが効果的であったと考える。

(F 小学校 90.7% ⇒ 90.7% 0.0%→ )

- ・教師が児童の自己肯定感を大切にしようと接してきたこともあって、児童同士の人間関係もよく、授業中の発言に対して肯定的に受け止める風土がある。
- ・学年の人数も40名強なので、毎年適度に学級編成を行うことができることも要因ではないかと考える。

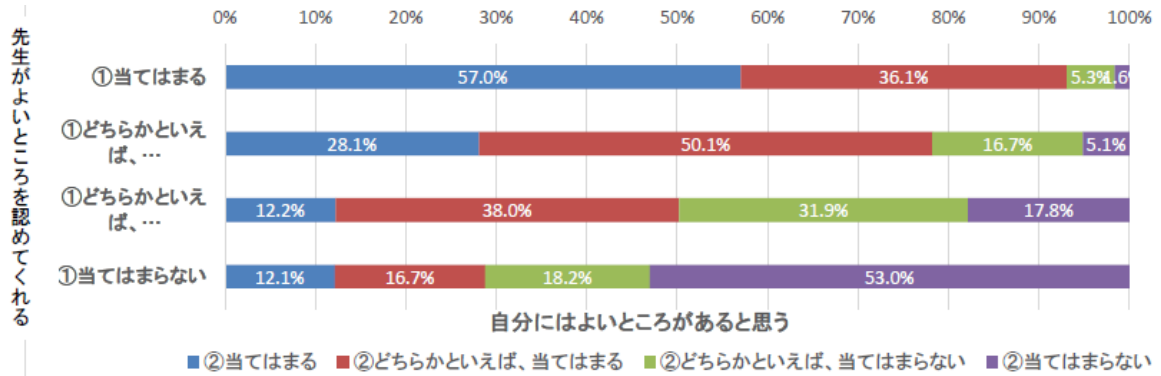
(G 小学校 71.4% ⇒ 92.1% 20.7%↑ )

- ・昨年度の40人1学級を20人の2学級にしたため、教員がきめ細やかな指導ができていることが大きいと考えている。子どもたちも教員や友達に自分を認めてもらえると感じているようで、保護者からも肯定的な声が上がっている。
- ・数年前から課題であると捉えていた自己肯定感の向上は、継続して校内研究で意識してきた成果の現れでもあると考えている。学年を超え、全教員が全児童に対して、同じ意識で関わるようにしてきたことの成果と捉えている。
- ・授業でも自分の意見や他者の意見を尊重しながら考える授業を行っている。

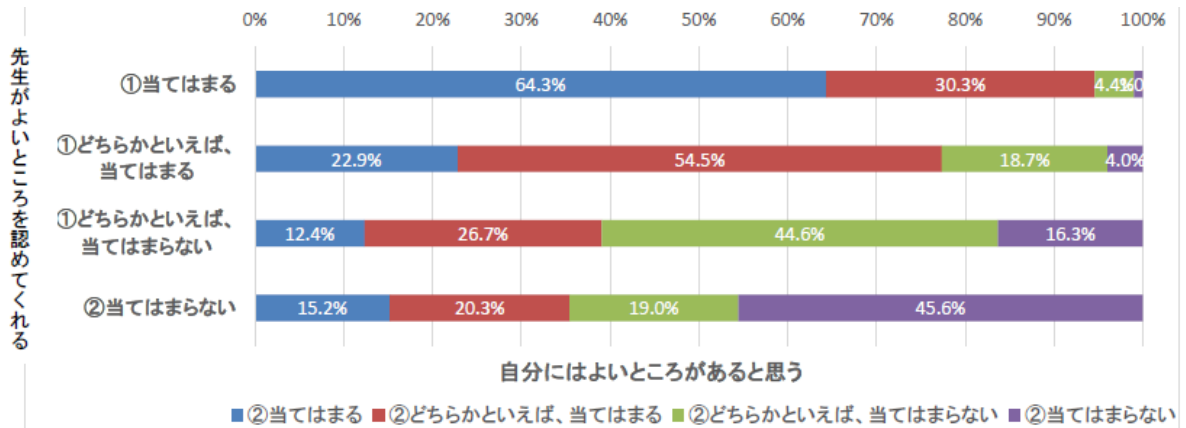
## 目標 1 学び合う集団の育成を図る

図2 全国学力・学習状況調査（小6・中3）の分析結果 ～ 教科に関する調査結果と質問紙調査結果のクロス集計 ～②

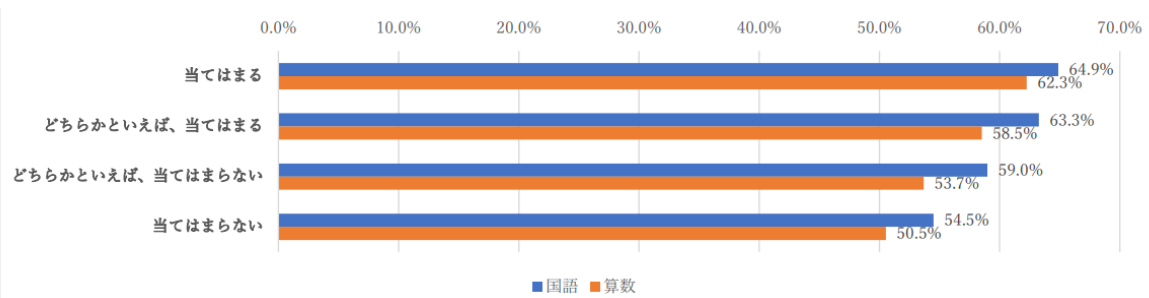
〔先生がよいところを認めてくれる〕 × 〔自分にはよいところがあると思う〕（本市 小6）



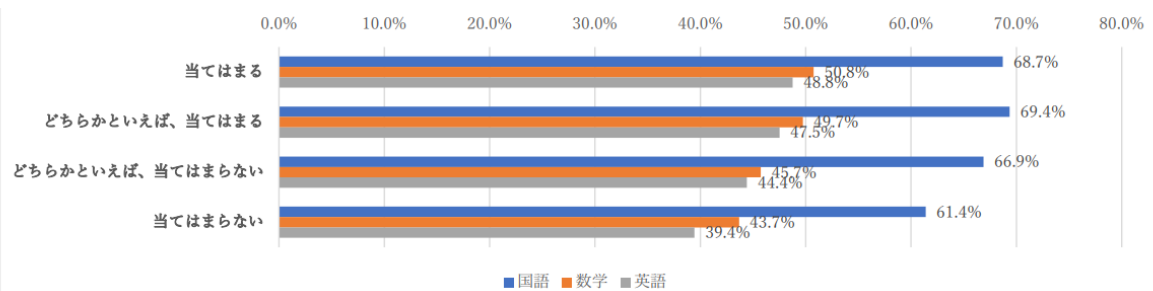
〔先生がよいところを認めてくれる〕 × 〔自分にはよいところがあると思う〕（本市 中3）



〔自分にはよいところがあると思う〕 × 平均正答率（本市 小6）



〔自分にはよいところがあると思う〕 × 平均正答率（本市 中3）



## 目標 2 粘り強く学ぶ力の育成を図る

### ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が向上した要因について

(A 中学校 80.9% ⇒ 82.0% 1.1%↑)

- ・生徒の実態は前述したとおりであるが、それでも授業中や試験において各教科等とも「ここまではできるようになってほしい」という願いをもって指導をし続けた。生徒の実態ではやや難しい課題があったと思うが、生徒たちは乗り越える楽しさ、理解できるようになるうれしさを少しずつ実感できるようになっている。そのことが「難しい課題に挑戦する姿勢」の向上につながったと判断する。
- ・小さな成功体験を積み重ね、「挑戦する」というレディネスが少しずつ高まってきている。

(B 中学校 75.6% ⇒ 87.8% 12.2%↑)

- ・自分で考える力を高めることを目的に、朝の10分間に思考力を働かせる問題に個人で取り組む「シンキングパワー」（朝学習の時間を使い、思考力を高める問題等に取り組む時間）を行っている。

(D 中学校 74.1% ⇒ 85.1% 11.0%↑)

- ・教師がやらせるのではなく、「子どもに考えさせよう」「考えるプロセスを大切に」を合言葉としてきた。教科等の授業だけでなく、生徒会も、校則も同様に取り組むようにしている。

(E 小学校 65.1% ⇒ 76.9% 11.8%↑)

- ・教科等や単元や題材などの特性にもよるが、子どもたちが「やってみたい」「考えてみたい」と捉えたものは、じっくり時間を確保し、とことん追究させることが多い。職員によってその軽重はあるが、成果を上げている学年ではそういった取り組みが行われている。

(G 小学校 74.3% ⇒ 86.7% 12.4%↑)

- ・まだまだ粘り強く学ぶ力は不足していると感じているが、あきらめたり、投げ出したりしそうな子どもたちには、教員が日常的に粘り強く励ましの言葉をかけている。



「記述により回答する問題の無回答率」が減少した要因について

(A 中学校 国 46.7% ⇒ 21.4% 25.3%↓ 数 32.1% ⇒ 21.8% 10.3%↓)

- ・上述の通り課題を出す際に「ここまではできるようになってほしい」という願いを持って教師がまず粘り強く求め続けた結果だと考える。
- ・問題の答え方や公式を覚えるだけでなく、授業の中で考え他者と意見交換をするなかで、どのように解答すればいいかを考える力を身に付けてきたことも要因と考える。

(G 小学校 国 23.5% ⇒ 16.2% 7.3%↓ 算 16.2% ⇒ 24.3% 8.1%↑)

- ・何もしないことは自分の力を発揮するチャンスを失うことになることと繰り返し伝えている。
- ・もともと書くことが、得意ではない子どもが多かったので、国語をはじめ様々な教科等で、ノートと併せて1人1台端末で書かせる時間をとるようにしていた。1人1台端末は、書いたものの順番を変えたりすることが簡単のため、書くことの取組のハードルが下がったと感じている。書いたことの推敲の時間が十分にとれたことも結果につながったのではないかと考える。
- ・紙に書くことと1人1台端末に書くことは、子どもたちが自分で選ぶことができ、書きはじめに關しての子どもたちのハードルを下げようとしたことも要因となっていることも考えられる。

(H 小学校 国 44.4% ⇒ 15.6% 28.8%↓ 算 16.7% ⇒ 17.8% 1.1%↑)

- ・席替えでは、教師が学習集団で核になる児童をちりばめて座席を配置し「自由に席を立っても構わない」と教師から子どもたちの意識を変える投げかけを続け、子ども同士の学び合いが促進した。
- ・鉛筆で書くだけでなく、1人1台端末に入力し、共有、発表する機会を意図的に増やした。
- ・「(自分の考えを)書くことを大切に」「自分の考えを少しでも伝えよう」「正解にこだわらない」と日頃から、声を掛け意識付けるようにした。
- ・1人1台端末を通して共有する、互いの考えを参考にする、自分の意見のもとにする等の機会を意図的に増やした。発表の際には、発表が苦手な子の意見を教師が価値付けることを心がけた。
- ・家庭で自主学習に取り組むことを宿題にして、自分の興味をまとめる・表現する取り組みを日頃に行えるようにした。

(I 小学校 国 60.0% ⇒ 25.0% 35.0%↓ 算 30.0% ⇒ 25.0% 5.0%↓)

- ・書く力を付けるために、振り返りを多くの教科等で行い、時間を決めて、ある程度の分量を書く機会をつくった。
- ・学習支援員の個別支援、TT授業を継続し、より効果的な指導支援の方法を探った。
- ・学校図書館の使い方指導、児童会図書委員による学校図書館イベントや読み聞かせ会などを行い、年間を通して、児童が本に接する機会を今後も多く取るようにしていた。

## 目標 3 学力層全体の引き上げを図る

### ◆同一集団の経年変化の上昇

平均正答率の割合が、同一集団の前年度の数値を上回った要因について

(A 中学校 国 74.4% ⇒ 93.3% 18.9%↑ 数 78.1% ⇒ 90.9% 12.8%↑)

- ・「授業の成立」や「個々の課題に向き合う姿勢」「行動や結果に対する正当な評価」など学校において大切とされてきたことを大多数の生徒が必要だと考えてくれた結果、底上げにつながったのではないかと分析する。
- ・授業においてインプットだけではなく、学び合い活動を通してアウトプットをすることを繰り返し取り組んだことが学力上位層の成長につながったのではないかと分析する。
- ・課題を終えた生徒にはさらに次の課題を用意し、より自身を高めるように授業をデザインしている。

(D 中学校 国 101.7% ⇒ 107.3% 5.6%↑ 数 103.7% ⇒ 108.4% 4.7%↑)

- ・1人1台端末の活用によって、学習内容の定着と思考力の育成の相乗効果を感じている。アンケートから生徒もそれを実感していることがわかる。

(H 小学校 国 87.5% ⇒ 97.2% 9.7%↑ 算 91.7% ⇒ 91.8% 0.1%↑)

- ・基礎学力を高めるための特別なことはしていない。因果関係が定かではないが、1人1台端末を利用したドリルパーク（国・算）を朝学習や授業中課題終了後の時間などで、自分のペースで各自が取り組むことを認めていたことが要因としてあるのかもしれない。

(I 小学校 国 61.7% ⇒ 95.7% 34.1%↑ 算 88.1% ⇒ 94.7% 6.6%↑)

- ・学ぶ楽しさ、学ぶ意味に気付かせる授業を心がけるとい目標をもち、それぞれの教員が授業を行っている。人と関わる楽しさを通して、お互いを認め合い関係を深める学級づくりを心がけている。

#### 抽出校に共通した指導に生かせる視点

**A** 日常的に自由に話し合える風土

**B** 安心して学ぶことができる教師のかかわり

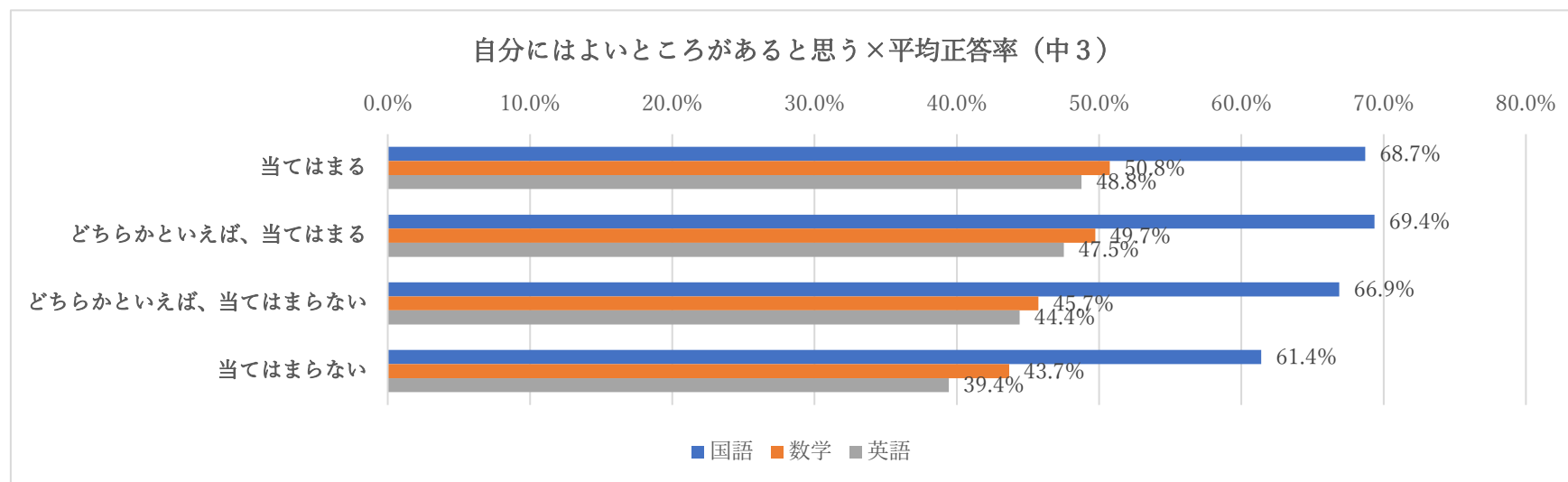
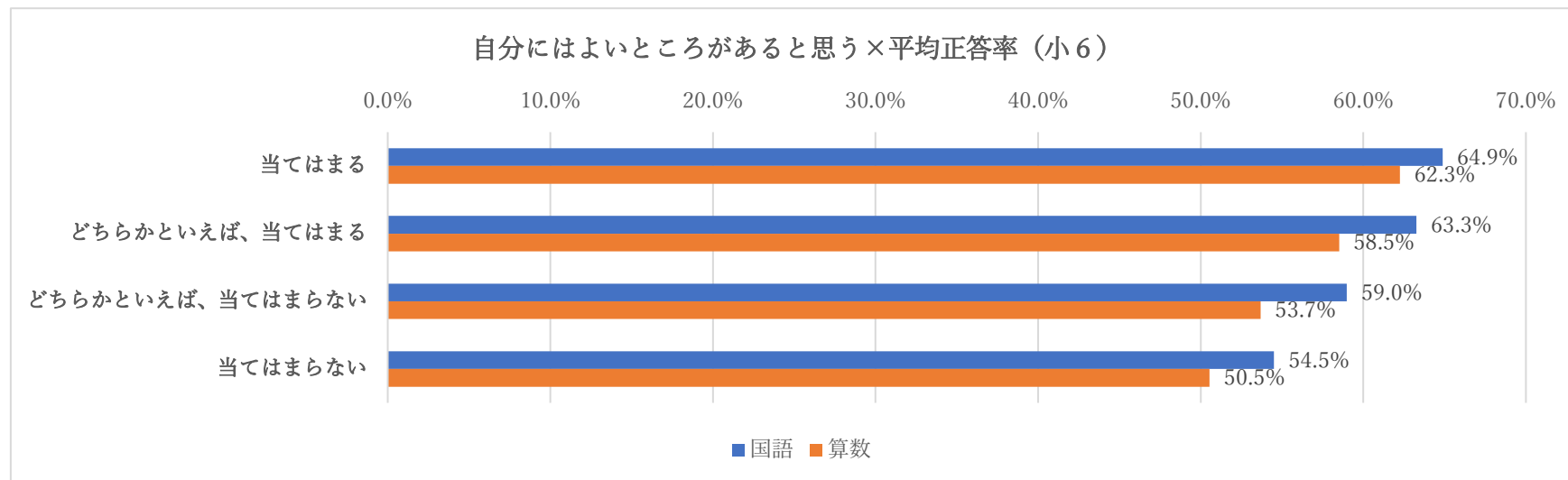
**C** 必然性のある動機付け

**D** 学びの自覚や実感を伴った振り返り

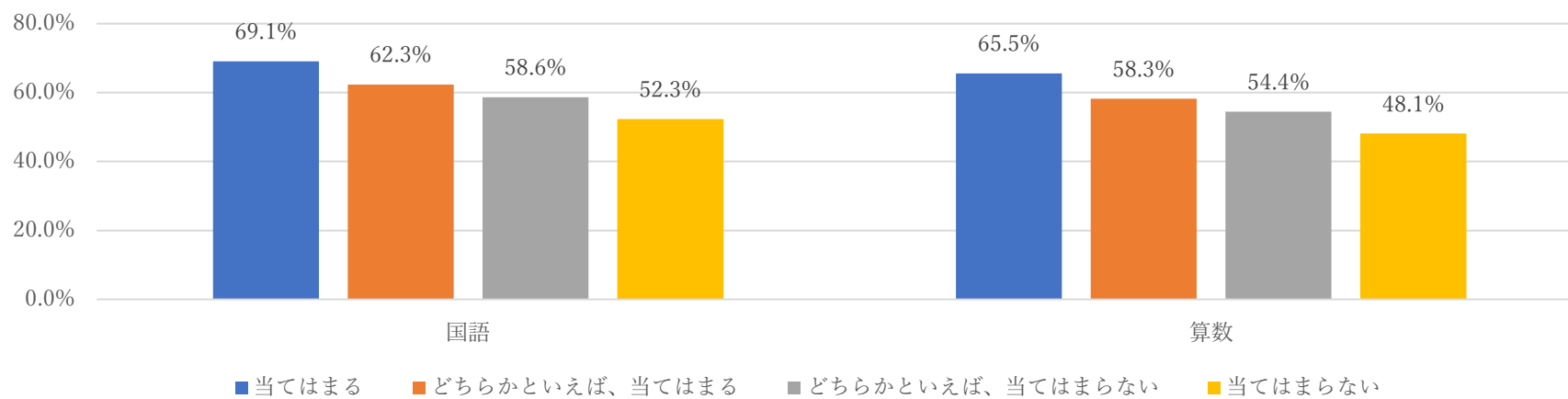
調査結果が大きく上昇した学校の取組には左のような共通点がありました。各校の記述からは、子どもたちが安心できる教室の中で自由に話し合う姿や、その姿をあたたく見守り、時には子どもと一緒に話し合うことを楽しむ教師の姿が想像できます。特別な何かをするということではなく、目の前の子どもをいかに大切にすることが、学力向上の根本であるということを改めて確認することができました。



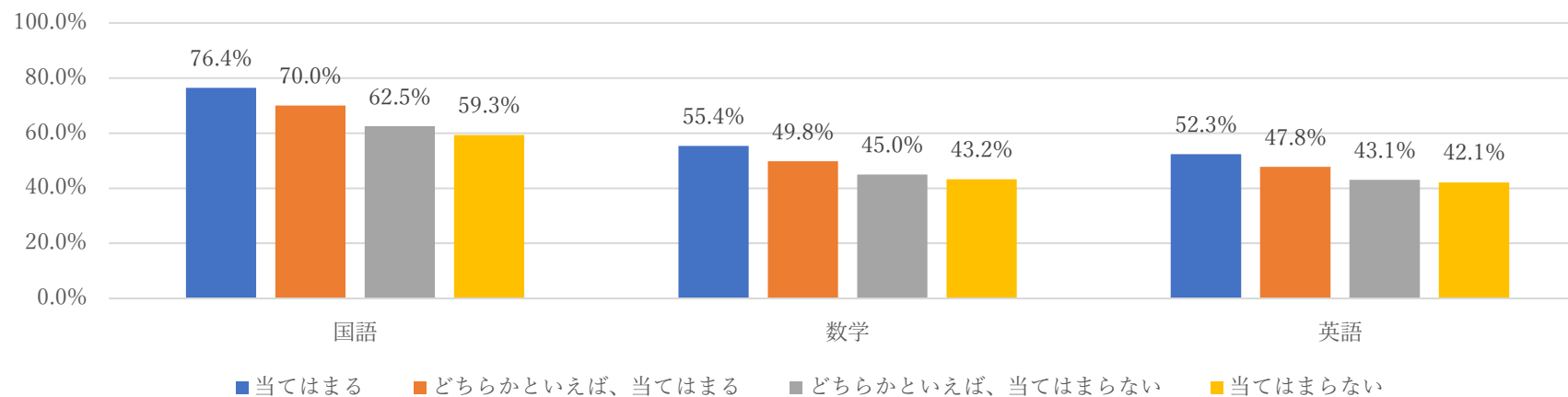
全国学力・学習状況調査における横須賀市の児童生徒の「児童生徒質問紙調査」と「教科に関する調査」結果によるクロス集計



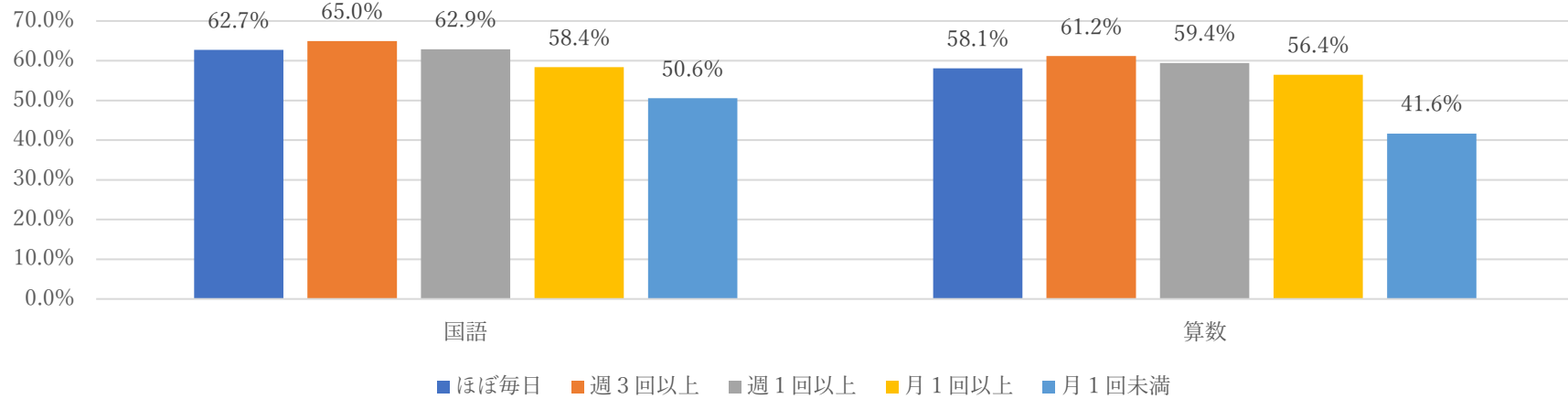
読書が好きですか×平均正答率（小6）



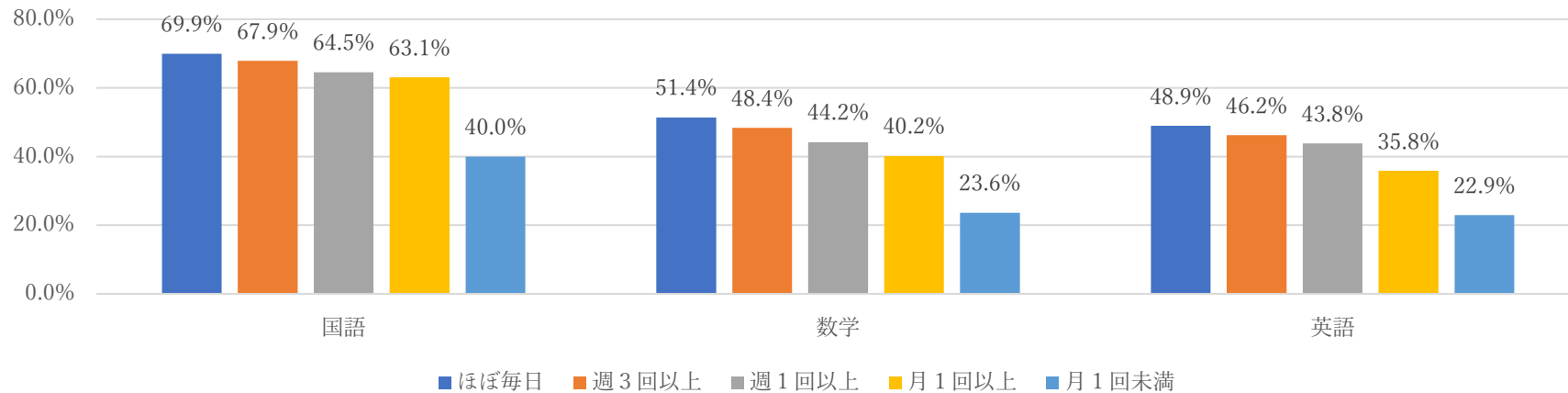
読書が好きですか×平均正答率（中3）



5年生までの授業でPC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか×平均正答率（小6）



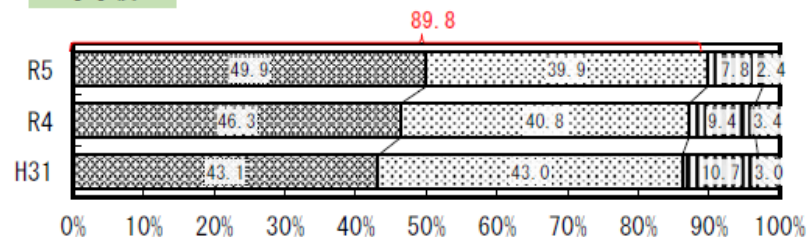
1、2年生までの授業でPC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか×平均正答率（中3）



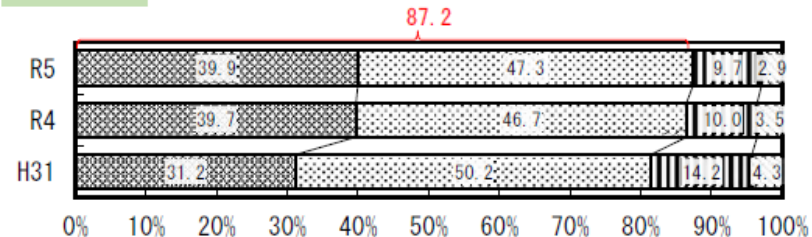
【児童生徒】先生は、あなたのよいところを認めてくれていますか。

当てはまる
  どちらかといえば、当てはまる
  どちらかといえば、当てはまらない
  当てはまらない

小学校



中学校



【先生がよいところを認めてくれる】×【自分にはよいところがあると思う】

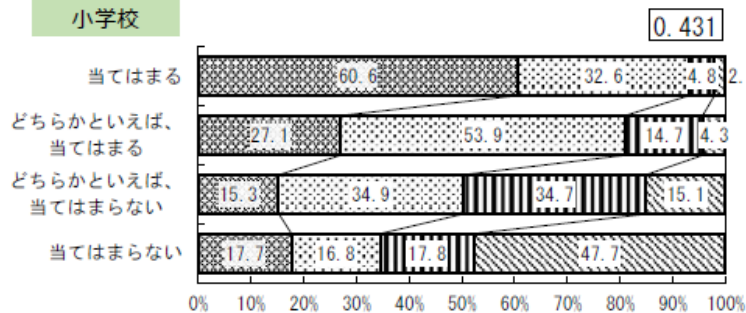
自分には、よいところがあると思いますか

当てはまる
  どちらかといえば、当てはまる
  どちらかといえば、当てはまらない
  当てはまらない

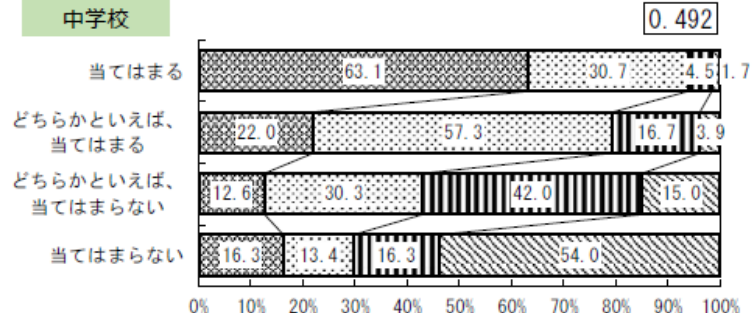
クロス集計

先生は、あなたのよいところを認めてくれていますか

小学校



中学校

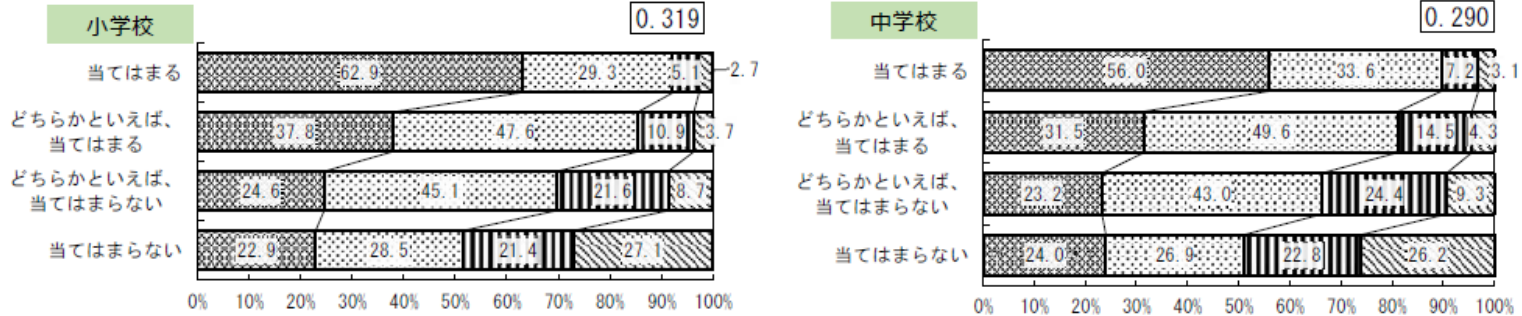


【課題の解決に向けて自分から取り組んだ】 × 【自分にはよいところがあると思う】

自分には、よいところがあると思いますか

当てはまる
  どちらかといえば、当てはまる
  どちらかといえば、当てはまらない
  当てはまらない

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

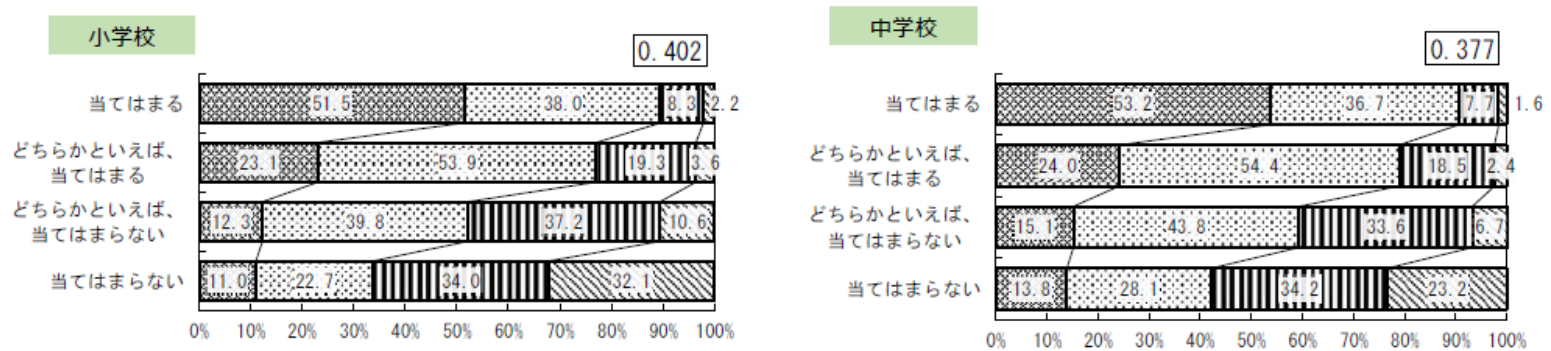


【話し合いにより考えを深め広げた】 × 【自分と違う意見について考えるのは楽しい】

自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか

当てはまる
  どちらかといえば、当てはまる
  どちらかといえば、当てはまらない
  当てはまらない

学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか



「社会経済的背景(SES)」 「主体的・対話的で深い学び」 「平均正答率」の関係

○家庭の社会経済的背景(SES: Socio-Economic Status)\*が低い児童生徒ほど、各教科の正答率が低い傾向が見られる。

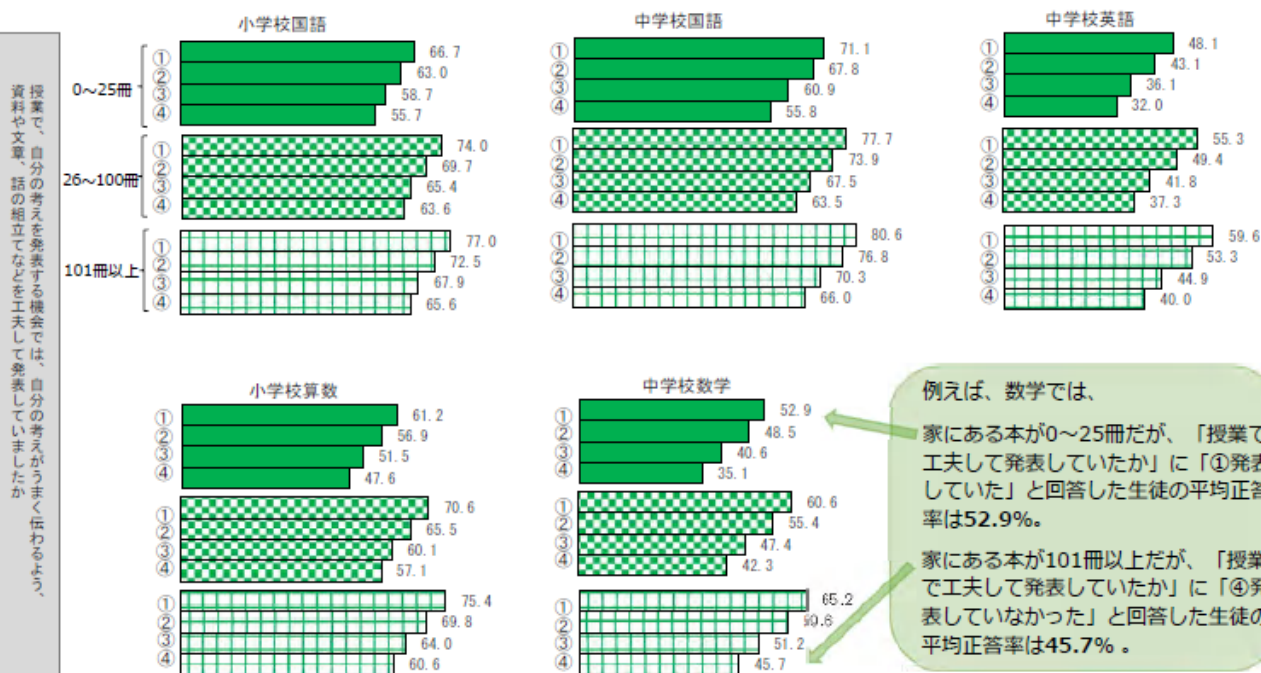
○しかし、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだ児童生徒は、SESが低い状況にあっても、各教科の正答率が高い傾向が見られる。

\*本資料では、国際学力調査も参考に、「家にある本の冊数」を家庭のSESの代替指標として用いている。

三重クロス集計

[家にある本の冊数] × [授業で工夫して発表していたか] × [各教科の平均正答率]

■ 0~25冊 ■ 26~100冊 ■ 101冊以上 ①発表していた ②どちらかといえば、発表していた ③どちらかといえば、発表していなかった ④発表していなかった



(※) 他の「主体的・対話的で深い学び」に関する設問においても同様の傾向が見られる。

## 令和 5 年度（2023 年度） 学力等調査の結果について

子どもたちに「確かな学力」を育むためには、学校だけでなく家庭や地域のご協力が必要です。子どもたちの学力や学習状況の現状を理解していただくとともに、学校教育活動にも積極的なご支援をいただくためにも、本年度も本市の状況および課題について公表することとしましたので、ご理解いただきますようお願いいたします。

### 1 横須賀市立小・中学校学習状況調査

小学校 2～5 年生と中学校 1・2 年生を対象とした「横須賀市立小・中学校学習状況調査」について、令和 5 年 4 月 13 日(木)～4 月 21 日(金)に教科調査を、同年 5 月 1 日(月)～5 月 31 日(水)に質問紙調査をそれぞれ実施しました。

本市が実施している学習状況調査は、各学年、各教科概ね 13 万人から 20 万人が参加しています。他の自治体でも本市の学習状況調査と同一の問題を用いて実施しており、本市の結果を全国の状況と比較することができます。

本市では、限られた教科および学年での実施であることやそれぞれの設問が学習指導要領で定められている学習目標・内容の全てを網羅するものではないことから、調査結果が児童生徒の学力すべてを表すものではなく、学力や児童生徒の生活習慣の一側面を示すものと考えています。

しかし、本学習状況調査の結果を児童生徒の学習状況を客観的に把握するための資料の一つと捉え、今後の市の教育施策の充実や学校における児童生徒の個性や能力に応じた学習指導の改善のために役立てていきたいと考えています。

#### (1) 調査の概要

##### ア 調査の目的

横須賀市立小・中学校学習状況調査を実施し、横須賀市の児童生徒の学習状況を把握・分析し、その調査結果を各学校の指導方法の工夫・改善および児童生徒の学習に役立て、横須賀市として必要な施策の策定に資することを目的としています。

##### イ 調査事項

小学校 2～5 年生：①国語（聞き取り 有） ②算数 ③質問紙

中学校 1・2 年生：①国語（聞き取り 有） ②数学 ③質問紙

※各学年・各教科、前学年までの履修内容を出題範囲としています。

##### ウ 公表について

本市全体の状況及び課題について、公表いたします。

※序列化や過度な競争につながらないようにするため、各学校の結果については、公表いたしません。



## (2) 横須賀市立学校の教科別結果

### 【小学校 2 年生】

	国 語			算 数		
	教科全体	基 礎	活 用	教科全体	基 礎	活 用
全国平均正答率	76.9	85.7	60.6	82.9	87.5	63.0
本市平均正答率	70.8	80.2	53.3	79.3	84.2	58.2
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	92.1	93.6	88.0	95.7	96.2	92.3

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 7.9 ポイント下回りました。また、基礎において 6.4 ポイント、活用において 12 ポイント下回りました。

各領域において、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「話すこと・聞くこと」は全国平均正答率と同程度でしたが、「読むこと」は 8 ポイント程度、「書くこと」は 13 ポイント程度下回りました。

条件に沿って書く作文の無解答率が本市は 28.7% と高く、「書くこと」への抵抗をなくしていけるような指導が必要です。

#### 【算数】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 4.3 ポイント下回りました。また、基礎において 3.8 ポイント、活用において 7.7 ポイント下回りました。

各領域において、「数と計算」、「図形」、「測定」は全国平均正答率と同程度でしたが、「データの活用」は全国平均正答率を 9 ポイント程度下回りました。

「数と計算」において、示された減法の式から、適切な文章問題を作る問題では、全国平均正答率を 14 ポイント下回っていました。加法・減法の学習において、具体的な場面を通して式が何を意味しているのか言葉で説明したり、示された式にあった文章問題を作ったりすることができるような指導が必要です。



### 【小学校3年生】

	国 語			算 数		
	教科全体	基 礎	活 用	教科全体	基 礎	活 用
全国平均正答率	72.5	80.0	57.6	74.6	80.3	54.3
本市平均正答率	65.2	72.6	50.5	71.0	77.0	49.4
全国平均正答率を 100としたときの 本市の正答率	89.9	90.8	87.7	95.2	95.9	91.0

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を100としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では10.1ポイント下回りました。また、基礎において9.2ポイント、活用において12.3ポイント下回りました。

各領域において、「話すこと・聞くこと」は全国平均正答率と同程度でしたが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「書くこと」、「読むこと」については、いずれも7～8ポイント程度下回りました。

条件に沿って書く作文の無解答率が本市は42.6%と高く、目的意識と相手意識をもちながら書くことに慣れる指導が必要です。

#### 【算数】

全国平均正答率を100としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では4.8ポイント下回りました。また、基礎において4.1ポイント、活用において9ポイント下回りました。

各領域において、「数と計算」、「図形」、「測定」、「データの活用」のいずれも、全国平均正答率と同程度でした。

「数と計算」において、加法の結合法則を用いて、考え方に合うように式に括弧を書く問題では、全国平均正答率を8ポイント程度下回りました。また、「図形」において、理由を記述する問題の無解答率が本市は39.7%と高く、正答率も低いことから、長方形と正方形の特徴やその違いについて理解を深める中で、数学的な表現を用いて論理的に説明することができるような指導が必要です。

### 【小学校 4 年生】

	国 語			算 数		
	教科全体	基 礎	活 用	教科全体	基 礎	活 用
全国平均正答率	70.8	75.8	59.7	71.9	76.0	59.5
本市平均正答率	64.2	69.6	52.3	67.0	70.9	55.4
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	90.7	91.8	87.6	93.2	93.3	93.1

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 9.3 ポイント下回りました。また、基礎において 8.2 ポイント、活用において 12.4 ポイント下回りました。

各領域において、「我が国の言語文化に関する事項」、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」は全国平均正答率と同程度でしたが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」は 7 ポイント程度、「情報の扱い方に関する事項」は 8 ポイント程度、「書くこと」は 10 ポイント程度下回りました。

条件に沿って書く作文の無解答率が本市は 38.7%と高く、理由を明確にして自分の意見を論理的に書く指導の継続が必要です。

#### 【算数】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 6.8 ポイント下回りました。また、基礎においては 6.7 ポイント、活用において 6.9 ポイント下回りました。

各領域において、「数と計算」、「図形」、「データの活用」は全国平均正答率と同程度でしたが、「測定」は全国平均正答率を 6 ポイント程度下回りました。

「測定」において、1mm や 1mL を何倍すると 1m や 1L になるかを選ぶ問題は、全国平均正答率を 14 ポイント程度下回りました。単位どうしの関係や単位換算の手順について確認するとともに、実際に長さやかさなどを測定する活動を大切にして指導する必要があります。同じく「測定」において、理由を記述する問題の正答率が、本市は最も低く、無解答率も 19.7%でした。数学的な表現を用いて論理的に説明したり、判断や考えの正しさを説明したりすることができるような指導が必要です。

**【小学校 5 年生】**

	国 語			算 数		
	教科全体	基 礎	活 用	教科全体	基 礎	活 用
全国平均正答率	70.0	74.5	59.7	67.1	71.2	59.3
本市平均正答率	65.0	69.4	55.3	58.3	62.5	50.2
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	92.9	93.2	92.6	86.9	87.8	84.7

**各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項**

**【国語】**

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 7.1 ポイント下回りました。また、基礎において 6.8 ポイント、活用において 7.4 ポイント下回りました。

各領域において、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」は全国平均正答率と同程度でしたが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」は 6 ポイント程度、「書くこと」は 8 ポイント程度下回りました。

条件に沿って書く作文の無解答率が本市は 29.8% と高く、各児童のつまずきの内容に応じた「書くこと」の指導の充実が必要です。

**【算数】**

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率では、全国と比較して教科全体では 13.1 ポイント下回りました。また、基礎において 12.2 ポイント、活用において 15.3 ポイント下回りました。

各領域において、「数と計算」、「図形」、「変化と関係」、「データの活用」のいずれも、全国平均正答率を 8～9 ポイント程度下回りました。

「数と計算」において、小数第一位ー小数第二位の計算問題は、全国平均正答率を 14 ポイント下回りました。また、「数と計算」、「図形」において、理由を記述する問題の無解答率は、本市は 36.0%、37.5% と高く、正答率も低いことから、自分や仲間の考えを論理的に説明し、伝え合う活動を通して、数学的な表現を用いて記述できるような指導が必要です。

### 【中学校 1 年生】

	国 語			数 学		
	教科全体	基 礎	活 用	教科全体	基 礎	活 用
全国平均正答率	59.2	64.0	49.9	65.8	67.5	61.0
本市平均正答率	55.5	60.8	45.6	62.4	64.4	56.8
全国平均正答率を 100としたときの 本市の正答率	93.8	95.0	91.4	94.8	95.4	93.1

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 6.2 ポイント下回りました。また、基礎において 5 ポイント、活用においては 8.6 ポイント下回りました。

各領域において、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」は全国平均正答率と同程度でしたが、「書くこと」は 7 ポイント程度下回りました。

条件に沿って書く作文の無解答率が本市は 38.1%と高く、資料から読み取ったことを根拠としながら自分の考えを述べる指導の充実が必要です。

#### 【数学】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 5.2 ポイント下回りました。また、基礎において 4.6 ポイント、活用において 6.9 下回りました。

各領域において、「数と計算」、「図形」は、全国平均正答率と同程度でしたが、「変化の関係」、「データの活用」は、全国平均正答率を 4 ポイント程度下回りました。

「変化の関係」において、単位量あたりの値を求める式が、どのような数量を表す式かを説明する問題の無解答率が、本市は 28.0%と高く、また正答率も低いことから、単位量あたりの大きさについて小学校の学びを振り返る場面を設ける必要があります。

## 【中学校 2 年生】

	国 語			数 学		
	教科全体	基 礎	活 用	教科全体	基 礎	活 用
全国平均正答率	63.9	68.7	54.8	53.4	59.5	35.9
本市平均正答率	60.8	66.2	50.6	50.0	55.7	33.5
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	95.1	96.4	92.3	93.6	93.6	93.3

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 4.9 ポイント下回りました。また、基礎において 3.6 ポイント、活用において 7.7 ポイント下回りました。

各領域において、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」は全国平均正答率と同程度でしたが、「書くこと」は 5 ポイント程度下回りました。

条件に沿って書く作文の無解答率が本市は 24.5% と高く、資料から読み取ったことを根拠としながら自分の考えを述べる指導の充実が必要です。

#### 【数学】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して教科全体では 6.4 ポイント下回りました。また、基礎において 6.4 ポイント、活用において 6.7 下回りました。

各領域において、「数と式」、「図形」、「関数」は全国平均正答率と同程度でしたが、「データの活用」の全国平均正答率は 6 ポイント程度下回りました。

「データの活用」において、2つの度数折れ線から、ある傾向が強いと思われる一方を選び、その理由を説明する問題は、全国平均正答率を 6 ポイント程度下回りました。また、「数と式」において、与えられた文章題に対して、適切な式を立式する問題の無解答率が本市は 34.0% と高く、正答率も低いことから、問題の中から何を  $x$  と置き、二通りに表される数量を見だし方程式を立てる一連の活動の充実が必要です。

学年・教科によって傾向は異なりますが、全ての学年・教科において、本市の児童生徒の平均正答率は、全国の児童生徒全体の平均正答率を下回っています。

各学年・教科の課題については結果とともにお示ししています。また、各学年・教科の指導改善のポイントについては、各学校に示します。

学年・教科によっても異なりますが、理由を説明したり、条件に沿って作文を書いたりするなど、記述することに課題が見られる傾向があります。教科を問わず、日々の授業において、自分の考えを表現したり、記述したりする力を伸ばすことができるよう、引き続き授業改善を図ります。

### (3) 横須賀市立学校の質問紙調査結果

質問紙調査における個々の質問を、表に示すカテゴリーに分類しています。それぞれのカテゴリーに分類される一つ一つの質問について、「最も望ましい／良好な選択肢」「次に望ましい／良好な選択肢」「改善／配慮を要する選択肢」「特に改善／配慮を要する選択肢」を点数化し、どの程度の児童生徒が肯定的な選択肢を選んだかを数値化しています。その数値をさらに、全国平均を50とする偏差値として算出した値を示しています。したがって、値が大きいほど肯定的な回答をした児童生徒の割合が高く、また値が50に近いほど全国に近いことが分かります。

		小2	小3	小4	小5	中1	中2
自己認識	家族のささえ	50.6	50.0	50.2	50.0	50.2	49.1
	友だちのささえ	49.8	50.5	50.2	49.6	49.8	49.4
	先生のささえ	50.8	49.9	50.4	50.1	49.8	49.0
	成功体験と自信	49.9	50.4	50.7	49.8	50.5	50.1
	充実感と向上心	50.1	50.4	50.5	49.6	50.1	49.5
	感動体験	50.7	50.3	50.1	49.9	50.9	50.1
	他者からの評価	—	50.5	50.3	49.8	50.6	50.8
社会性	規範意識	50.1	50.5	50.6	49.2	49.4	48.3
	思いやり（人間関係構築力）	50.9	50.7	50.6	49.6	50.1	49.4
	発信力	50.6	50.8	50.8	49.9	50.4	50.6
	対話・話し合い	51.1	50.6	51.0	50.7	52.9	52.4
	社会参画	—	—	—	49.0	50.1	48.4
学級環境	学級の規範意識	50.0	49.4	49.6	49.7	49.5	48.3
	学級の絆	51.0	50.0	50.3	50.1	50.7	49.2
	いじめのサイン	49.1	48.4	47.8	48.4	49.1	48.0
	対人ストレス	50.0	49.4	48.7	48.5	47.9	48.2
生活・ 学習習慣	生活習慣	49.4	49.6	50.3	50.0	49.6	49.1
	学習習慣	49.5	49.1	48.5	47.2	47.6	47.8
	学習意欲	49.6	50.1	50.3	50.0	50.5	49.1

※発達段階に合わせて質問が設定されているため、学年によって質問のない項目があります。

自己認識にかかわる項目については、いずれの学年においても全国とほぼ同程度と捉えることができます。社会性にかかわる項目のうち、「対話・話し合い」については、全ての学年において全国を上回っており、各校の学習活動において対話や話し合いを多く取り入れているとともに、児童生徒がその意義を実感していると捉えることができます。

学級環境にかかわる項目のうち、「いじめのサイン」「対人ストレス」については、全ての学年において下回っており、いじめやその兆候、人間関係の不安を感じている児童生徒の割合が全国と比較して高いと捉えられます。一人一人の状況を積極的に把握し、適切な指導及び支援を行うことが求められます。

生活・学習習慣にかかわる項目のうち、「学習習慣」については全ての学年において全国を下回っています。「学習意欲」については全国とほぼ同程度であることから、学習意欲を家庭での学習習慣につなげることができるよう、指導改善を図る必要があります。

## 2 全国学力・学習状況調査

小学校6年生と中学校3年生を対象とした「全国学力・学習状況調査」について、令和5年4月18日（火）に実施されました。

本市では、限られた教科および学年での実施であることや、それぞれの設問が学習指導要領で定められている学習目標・内容の全てを網羅するものではないことから、調査結果が学力すべてを表すものではなく、学力や児童生徒の生活習慣の一側面を示すものと考えています。しかし、本調査結果を児童生徒の学習状況や生活状況を把握するための資料の一つと捉え、今後の市の教育施策の充実や学校における児童生徒の個性や能力に応じた学習指導の改善のために役立てていきたいと考えています。

### （1）調査の概要

#### ア 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

#### イ 児童生徒に対する調査事項

##### （ア）教科に関する調査

\* 小学校調査は、国語、算数とし、中学校調査は、国語、数学及び英語とする。

\* 出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

\* 調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。出題形式については、記述式の問題を一定割合で導入する。

##### （イ）質問紙調査

\* 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査を実施する。

#### ウ 公表について

本市全体の状況及び課題について、公表いたします。

※ 序列化や過度な競争につながらないようにするため、各学校の結果については、公表いたしません。



## (2) 横須賀市立学校の教科別結果

### 【小学校 6 年生】

	国 語	算 数
全国平均正答率	67.2	62.5
本市平均正答率	63	59
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	93.8	94.4

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して 6.2 ポイント下回りました。

各領域において、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれも、全国平均正答率を 5 ポイント程度下回りました。

全国平均正答率と大きな差があった問題は、いずれも記述式の問題であったことから、資料や根拠をもとに、条件に合わせて自分の考えを記述する力の育成が課題となっています。

#### 【算数】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して 5.6 ポイント下回りました。

各領域において、「数と計算」、「図形」、「測定」、「変化と関係」、「データの活用」のいずれも、全国平均正答率と同程度でした。

全国平均正答率と大きな差があった問題は、「数と計算」における加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりして計算する問題で、9 ポイント程度下回りました。分配法則についての理解を深めるとともに、多数桁の乗法の計算を確実にできるように指導することが必要です。

### 【中学校 3 年生】

	国 語	数 学	英 語
全国平均正答率	69.8	51.0	45.6
本市平均正答率	68	49	47
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	97.4	96.1	103.1

### 各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

#### 【国語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して 2.6 ポイント下回りました。

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題の正答率は、全国平均正答率を大きく下回りましたが、それ以外の問題については、全国平均正答率とほぼ同程度という結果でした。

記述式の問題形式（全 4 問）については、無解答率がすべて全国平均を下回るなど、これまでの指導の成果がうかがえます。

#### 【数学】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して 3.9 ポイント下回りました。

各領域において、「数と式」、「図形」、「関数」、「データの活用」いずれも、全国平均正答率と同程度でしたが、「データの活用」のうち四分位範囲を求める問題は、全国平均正答率を 7 ポイント程度下回りました。

記述式の問題の中でも、結論が成り立つための前提を、問題解決の過程や結果を振り返って考え、成り立つことを見いだし説明する問題の無解答率が 25.4% と最も高く、事柄が成り立つことの説明を振り返り、新たに成り立ちそうな事柄を予想する活動を取り入れる指導が必要です。

#### 【英語】

全国平均正答率を 100 としたときの本市の平均正答率は、全国と比較して 3.1 ポイント上回りました。

「聞くことに」については、全ての問題で全国平均正答率を上回りましたが、欲しい情報を選んで聞き取ることについては、今後は特に意識して取り組むことが必要です。

「読むこと」については、概ね全国平均正答率と同等の結果でしたが、段落ごとの内容の捉え方や情報の正確な読み取りに課題が残りました。ポイントとなる接続詞（節）を理解の助けにしたり、様々な種類（テーマ）の文章に触れたりすることが重要です。

「書くこと」については、全ての問題で全国平均正答率を上回りましたが、正しい文構造を踏まえて文を書くことや、自分の意見や考えを文章でまとめることには課題があると言えます。

「話すこと」については、概ね全国平均正答率と同等の結果でしたが、日頃から目的・場面・状況に応じた意味あるやり取りを積み重ねること、そして自分の英語の運用について第三者からフィードバックをもらうことも有効です。

中学校3年生英語を除く、いずれの学年・教科においても、本市の児童生徒の平均正答率は、全国の公立学校の児童生徒全体の平均正答率を下回っています。しかし、中学校3年生国語および数学については、ほぼ同程度とみることができます。

各学年・教科の課題については結果とともにお示ししています。中学校3年の国語および英語においては、記述によって解答する問題の無解答率が全国平均を下回っており、これまでの指導の成果がうかがえます。今後も、日々の授業において、自分の考えを表現したり、記述したりする力を伸ばすことができるように指導するとともに、粘り強く課題に取り組む力を育成するように、指導改善を図ります。

### (3) 横須賀市立学校の質問紙調査結果

質問紙調査における小学校6年生・中学校3年生それぞれの質問事項のうち、本市の児童生徒の傾向と、全国の公立学校の児童生徒全体の傾向とが大きく異った質問事項は次の通りです。(「選択肢」に挙げた回答をした児童生徒の割合(複数の選択肢を挙げているものについては、それらの合計)について、本市と全国の値を比較し、その差が5ポイント以上の質問事項について示しています。)

#### 【小学校6年生】

##### 5ポイント以上低い質問事項

質問番号	質問事項	選択肢	本市 (%)	全国 (%)	差
(10)	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	63.2	68.5	△5.3
(16)	家で自分で計画を立てて勉強をしていますか(学校の授業の予習や復習を含む)	「①よくしている」 「②ときどきしている」	61.2	70.7	△9.5
(17)	学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)	「①3時間以上」 「②2時間以上、3時間より少ない」 「③1時間以上、2時間より少ない」	46.3	57.1	△10.8

(18)	土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか (学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)	「①4時間以上」 「②3時間以上、4時間より少ない」 「③2時間以上、3時間より少ない」	17.4	24.7	△7.3
(20)	学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、読書を行いますか(教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)	「①2時間以上」 「②1時間以上、2時間より少ない」 「③30分以上、1時間より少ない」	31.9	37.3	△5.4
(37)	学習した内容について、分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	71.4	77.4	△6.0
(43)	国語の勉強は好きですか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、あてはまる」	53.9	61.5	△7.6

### 【中学校3年生】

#### 5ポイント以上低い質問事項

質問番号	質問事項	選択肢	本市(%)	全国(%)	差
(10)	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	56.7	66.4	△9.7
(16)	家で自分で計画を立てて勉強をしていますか(学校の授業の予習や復習を含む)	「①よくしている」 「②ときどきしている」	48.3	55.0	△6.7
(20)	学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、読書を行いますか(電子書籍の読書も含む、教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)	「①2時間以上」 「②1時間以上、2時間より少ない」 「③30分以上、1時間より少ない」	22.8	28.4	△5.6
(24)	読書は好きですか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	59.9	66.0	△6.1

(30)	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	55.8	63.9	△8.1
(32)	日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国人にもっと知ってもらいたいと思いますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	57.5	63.2	△5.7
(57)	数学の授業の内容はよく分かりますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	67.7	73.3	△5.6
(58)	数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	70.2	75.8	△5.6

### 5ポイント以上高い質問事項

質問番号	質問事項	選択肢	本市 (%)	全国 (%)	差
(27)	学校の部活動で、普段（月曜日から金曜日）活動を行った日は、平均してどれくらいの時間、活動をしますか	「①3時間以上」 「②2時間以上、3時間より少ない」 「③1時間以上、2時間より少ない」	83.7	77.2	6.5
(33)	1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか	「①ほぼ毎日」 「②週3回以上」	84.6	61.1	23.5
(36)	1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか	「①発表していた」 「②どちらかといえば、発表していた」	71.8	62.1	9.7
(43)	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	82.8	72.6	10.2
(68)	1、2年生のときに受けた授業では、原稿などの準備をすることなく、(即興で)自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われていたと思いますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	71.8	63.8	8.0

(69)	1、2年生のときに受けた授業では、スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動が行われていたと思いますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	88.0	78.7	9.3
(71)	1、2年生のときに受けた授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりする活動が行われていたと思いますか	「①当てはまる」 「②どちらかといえば、当てはまる」	86.6	80.7	5.9

先に示した「横須賀市立小・中学校学習状況調査」の結果と同様、家庭での学習習慣が身につけていない児童の割合が、全国平均値よりも高い傾向がみられます。中学校3年生については、上記にあがっておりませんが、平日30分より少ない時間、または休日1時間より少ない時間しか勉強していない生徒の割合が全国平均値より高い傾向がみられます。また、小学校6年生・中学校3年生ともに、新聞を読まない児童生徒の割合が高く、平日に読書をしない児童生徒の割合についても、高い傾向にあります。

困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人に相談できると回答している児童生徒の割合が低い傾向があります。「横須賀市立小・中学校学習状況調査」の結果においても、「いじめのサイン」、「対人ストレス」について課題がみられているため、児童生徒一人一人の状況を把握し、適切な指導及び支援を行うことが求められます。

学校で、PC・タブレットなどのICT機器を使用する頻度については、中学校3年生において全国平均値を大きく上回っています。1人1台端末の配備から3年が経過した中学校においては、ICT機器が学習活動のツールとして定着していることがうかがえます。

### 3 本市の課題と今後の取組について

2つの調査の結果をふまえた本市の課題に対して、今後次のような取組を実施してまいります。

本市の小・中学校における課題	今後の取組
理由を説明したり、条件に沿って作文を書いたりするなど、記述することに課題がみられる。	記述、表現する力を伸ばすことができるような授業づくりを行う。特に、中学校においては、工夫して発表しようとする生徒の割合が高いので、それをきちんと記述する力につなげていく。
家庭での学習習慣が確立していない児童生徒の割合が高い。	学習意欲を高め、家庭での学習習慣を確立することができるよう、家庭と連携を密に取りながら、指導改善を図る。
新聞を読まない、平日に読書をしない児童生徒の割合が高い。	学校司書などを活用しながら、学校図書館を利用した探究的な学習や読書指導の充実を図る。
人間関係にストレスを感じている児童生徒が一定数いる。	各学校において、学級担任だけではなく、全教職員で連携を図るとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどとも連携しながら、児童生徒の状況把握及び適切な支援に努める。

横須賀市学力向上推進プラン目標指標 令和5年度(2023年度)検証の基準値  
《小4⇒小5の経年変化の状況》

小学校市全体

目標1 目標指標 ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査の質問紙調査にて、小5の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(小4時)を上回っているか。	小4時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	63.9	62.9
市学習調査の質問紙調査にて、小5の「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(小4時)を上回っているか。	小4時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	85.6	85.8

目標指標 ◆自己肯定感の向上

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査の質問紙調査にて、小5の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(小4時)を上回っているか。	小4時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	83.6	83.4

目標2 目標指標 ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査の質問紙調査にて、小5の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(小4時)を上回っているか。	小4時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	82.8	80.0
市学習調査にて、小5の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値(小4時)を下回っているか。	小4時の無解答率	毎年その前年度を下回る	国語 35.4 算数 22.5	国語 29.8 算数 36.7



### 目標3

#### 目標指標 ◆学力層の全体的な引き上げ

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査にて、小5の正答率 40%未満の児童の割合が、同一集団の前年度値（小4時）を下回っているか。	小4時の割合	毎年その前年度を下回る	国語 15.1 算数 10.6	国語 11.6 算数 22.5
市学習調査にて、小5の正答率 80%以上の児童の割合が、同一集団の前年度値（小4時）を上回っているか。	小4時の割合	毎年その前年度を上回る	国語 23.9 算数 38.0	国語 27.0 算数 27.0

#### 目標指標 ◆同一集団の経年変化の上昇

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査にて、小5の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値（小4時）を上回っているか。	小4時の割合	毎年その前年度を上回る	国語 91.4 算数 94.2	国語 93.0 算数 86.8

\*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

※下記は中学校3年生の数値のため、小学校には直接関係する数値ではない。

#### 目標指標 ◆全国平均に到達（中3生の結果）

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
全国学力調査にて、中3の国語・数学が全国の平均正答率に到達しているか。	中3の全国平均正答率	全国の平均正答率を上回る	国語 97.1 数学 95.3	国語 97.4 数学 96.4 英語 103.1

横須賀市学力向上推進プラン目標指標 令和5年度(2023年度)検証の基準値  
《中1⇒中2の経年変化の状況》

中学校市全体

目標1 目標指標 ◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査の質問紙調査にて、中2の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(中1時)を上回っているか。	中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	71.1	71.7
市学習調査の質問紙調査にて、中2の「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(中1時)を上回っているか。	中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	90.2	88.3

目標指標 ◆自己肯定感の向上

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査の質問紙調査にて、中2の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(中1時)を上回っているか。	中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	78.9	77.7

目標2 目標指標 ◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査の質問紙調査にて、中2の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値(中1時)を上回っているか。	中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	83.1	79.5
市学習調査にて、中2の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値(中1時)を下回っているか。	中1時の無解答率	毎年その前年度を下回る	国語 20.9 数学 15.2	国語 24.5 数学 20.4

### 目標3

#### 目標指標 ◆学力層の全体的な引き上げ

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査にて、中2の正答率40%未満の生徒の割合が、同一集団の前年度値(中1時)を下回っているか。	中1時の割合	毎年その前年度を下回る	国語 26.7	国語 17.9
			数学 12.4	数学 38.2
市学習調査にて、中2の正答率80%以上の生徒の割合が、同一集団の前年度値(中1時)を上回っているか。	中1時の割合	毎年その前年度を上回る	国語 11.9	国語 22.2
			数学 34.9	数学 12.9

#### 目標指標 ◆同一集団の経年変化の上昇

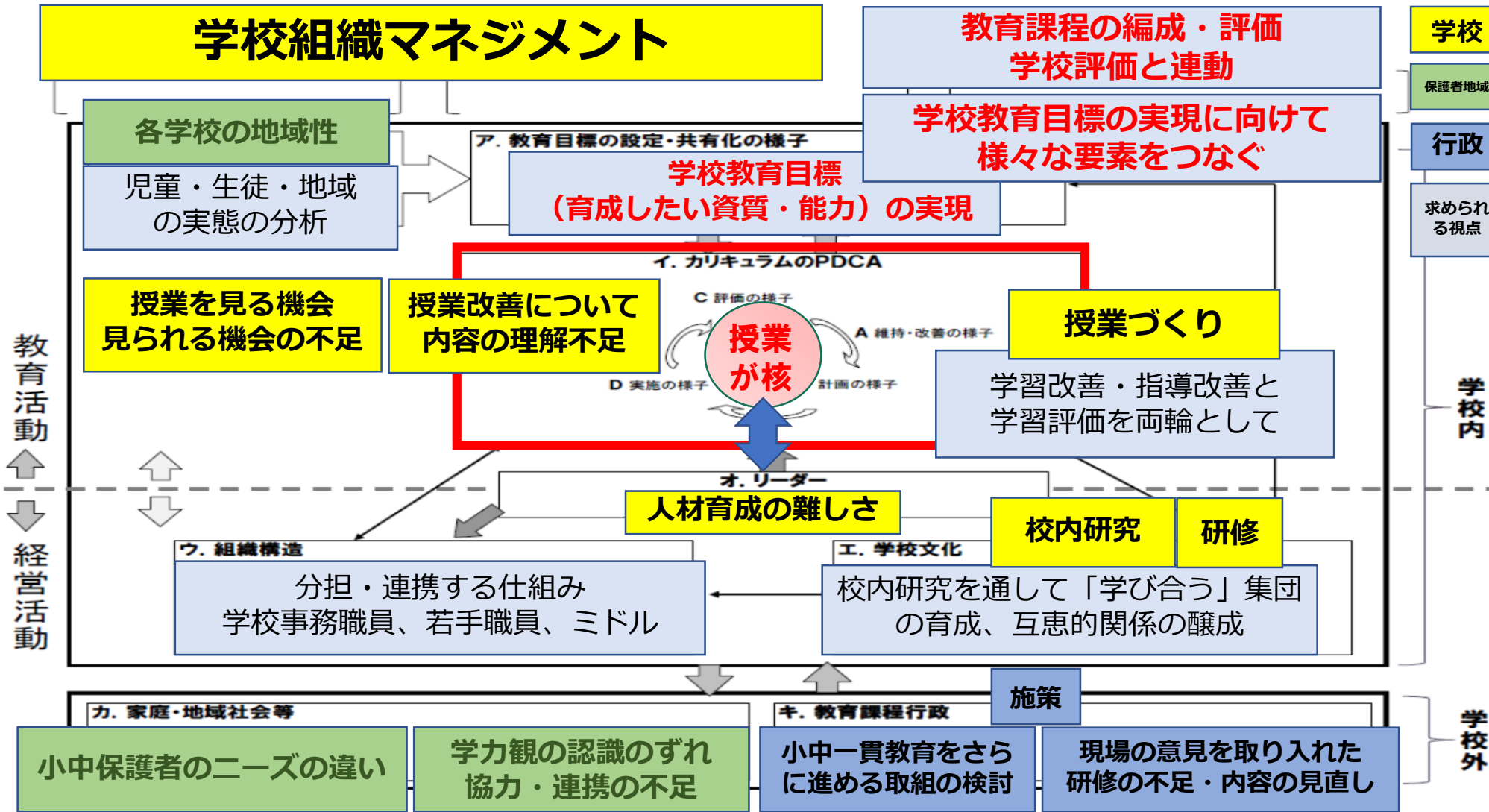
指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
市学習調査にて、中2の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値(中1時)を上回っているか。	中1時の割合	毎年その前年度を上回る	国語 93.8	国語 95.2
			数学 95.9	数学 93.6

\*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

#### 目標指標 ◆全国平均に到達(中3の状況、同一集団ではない)

指標	基準値	目標値	前年度 (%)	今年度 (%)
			市	市
全国学力調査にて、中3の国語・数学が全国の平均正答率に到達しているか。	中3の全国の平均正答率	全国の平均正答率を上回る	国語 97.1	国語 97.4
			数学 95.3	数学 96.4
				英語 103.1

# 学校組織マネジメント



## 11/15 第3回 学力向上推進委員会 桜小学校・坂本中学校 学校訪問(案)

## 訪問のねらい

学力向上推進プランの目標1「学び合う集団の育成」に向けて、児童生徒が自分のことを大切な存在だと実感できる（自己肯定感の向上につながる）教師の関わりや児童生徒が互いを認め合い、仲間と協働しているような場面を見付け、小学校から中学校に向けてどのように学び合う集団が育成されているのか、その過程について考える。

桜小学校		坂本中学校													
12:20	指導主事集合 全体会（委員控室）会場準備		12:20												
13:00	委員集合・開会 授業参観の視点・流れの確認		13:00												
13:20	5時間目 グループごとに授業参観														
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4年</td> <td>6年</td> <td>5年</td> </tr> <tr> <td colspan="3">移動</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>4年</td> <td>6年</td> </tr> </tbody> </table>	A	B	C	4年	6年	5年	移動			5年	4年	6年		
A	B	C													
4年	6年	5年													
移動															
5年	4年	6年													
13:33															
13:35		中学校は5時間目 授業開始	13:35												
13:48															
13:50	中学校へ委員移動	中学校でグループごとに授業参観	13:55												
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>2年</td> <td>3年</td> </tr> <tr> <td colspan="3">移動</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>3年</td> <td>1年</td> </tr> </tbody> </table>	A	B	C	1年	2年	3年	移動			2年	3年	1年	
A	B	C													
1年	2年	3年													
移動															
2年	3年	1年													
14:05	授業終了		14:08												
			14:10												
	※小学校は委員会活動がある (14:25～15:10)	HRや下校の様子なども見ていただく。 その後、桜小学校の全体会会場へ移動。	14:25												
			14:45												
	学力向上推進委員会①（会場校校長・できれば授業者も参加）														
	参観した授業から、学び合う集団の育成につながる各学校の取り組みや 授業づくりの視点で協議する。														
	①の協議終了		15:30												
	休憩（10分）※委員以外は退室														
	学力向上推進委員会②		15:30												
	②の協議終了		16:30												